515
134

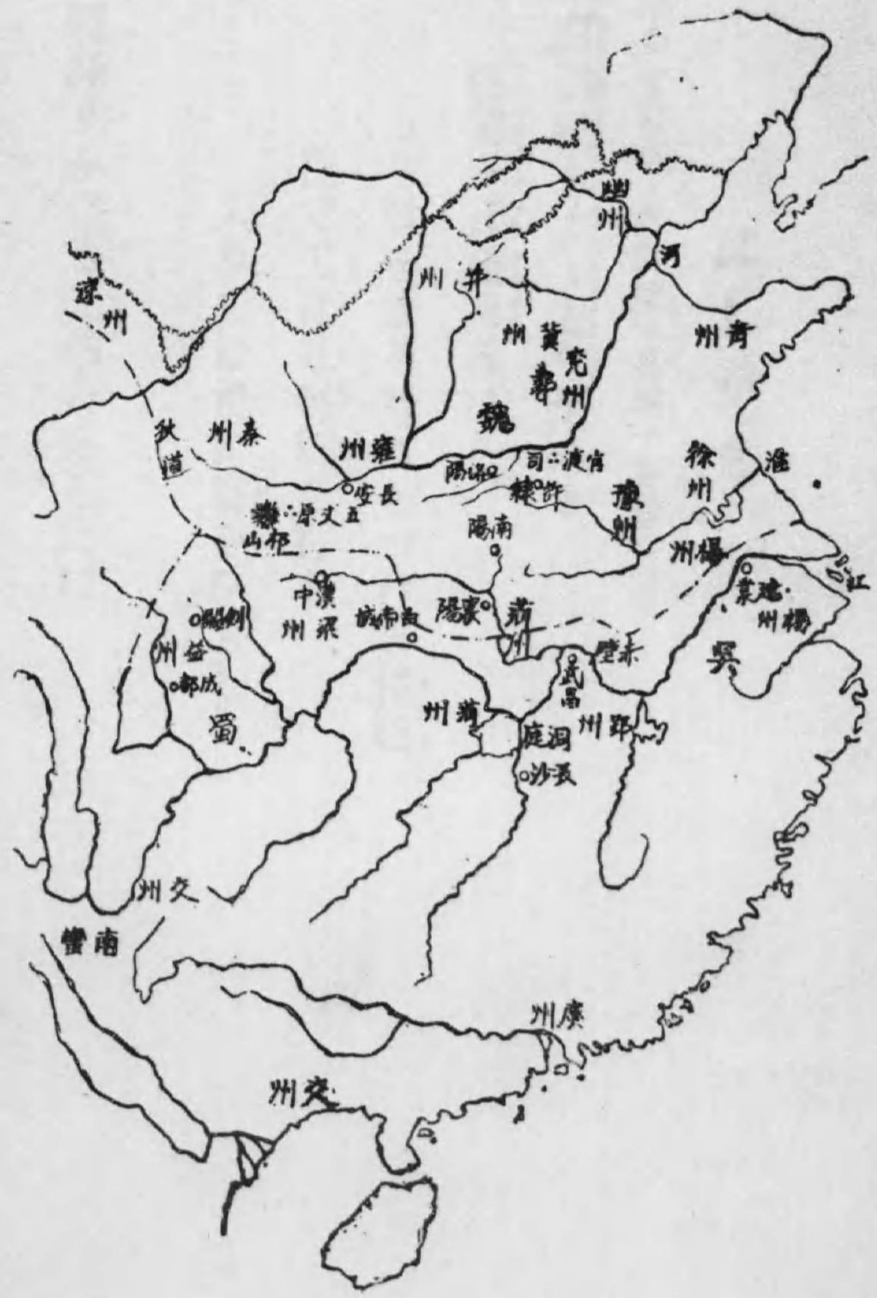
1工 3F-90

孔明

515-134

孔明

大正
13. 4. 15
内交


幽州
河
并州
冀州
兗州
青州
魏
涼州
秦州
雍州
秋道
長安
五原
北地
上邽
陽
洛陽
宜陽
許昌
豫州
徐州
淮
陽南
揚州
江
建業
揚州
襄陽
荊州
陸口
武昌
吳
中漢
梁州
城都
劍閣
益州
成都
蜀
荊州
廬江
沙羨
州郡
州交
南蠻
州廣
州交

はしがき

◉少年少女諸君、諸君は「孔明」を歌つた

白雲いう〳〵去り又來る。

西窓一片殘月あはし。

うき世をよそなるしづけき住居。

出でては日毎畑を打ち

入りては机に書をひもとく

雪降りみだるゝ冬のあしたに

風なほ冷たき春のゆふべに
劉備が三顧のこよなき知遇
我が身をすてゝ報いんと
起ちてぞ出でぬる、草のいぼりを。

天下を定むる三分の計
たなそこの上に指さすがごと。
いしずゑ固めし蜀漢の國
漢中王はおごそかに
帝の位をふませ給ひぬ

二代の帝に盡す眞心
強敵ひしぎて世をしづめんと
三軍進めし五丈原頭
はかなく露と消えしかと
其名はくちせず諸葛孔明

を讀んでも恐らく面白い所がわかりますまい。それは孔明の傳を一通り知らなくては無理です。三顧とは何だとか五丈原は何所にあるとか辭書でしらべても詩の味はわか

ありません。それをわかる迄學校で先生方がお話し下さることは時間が許しません。それで君達が一番よく詩を理解するにはこの『讀本の讀本』をお讀みになるがよろしい。

孔明といふ人は實にえらい方です。この小冊子だけでもわかりますが三國誌を讀んで見ますと更に深い感じにうたれます。出師の表は多くの漢文讀本に出て我國の青年に敎えてゐます。しかし孔明の傳を知らないで出師の表を讀んでも本當の氣持はわかりますまい。

私は全國の青少年諸君に孔明を知られることを特にこの際お勸めいたします。

目錄

◎時代……英雄を待つ……一
◎西窓の書見……雨讀晴耕……七
◎三顧の知遇……水魚の交……一九
◎三分の計……統一の道ゆき……二九
◎蜀漢の確立……孔明の奇才……五〇
◎二代に忠す……白帝城の對話……六四
◎七擒七縱……無敵の戰術……七九
◎前出師の表……讀んで泣かざるは忠臣にあらず……八六

◉英雄の心中……涙をふるつて馬謖をきる……九五
◉後の出師の表……王者を激励す……一〇八
◉祁山の用兵……彼は天下の奇才なり……一一一
◉秋風五丈原……俊傑は俊傑を知る……一一八
◉將星おつ……死せる孔明生ける仲達を走らす……一二八

——附録——

赤壁の戰

讀本の讀本

執行助太郎編

孔明

◉時代……英雄を待つ

歴史上の話は、その時代がどんな有様であつて、何所でどんな工合は誰が何をしたかがわからなくてはなりません。それでは孔明の生れた時代はどんな時代であつたかを觀察して見ねばなりませんが、それには先づ支那とはどんな國かと研究しなくてはわからなくなります。が五千年の歴史といはれる大國の有様をお話し

してゐては孔明まで行かぬ中にこんな本を何百何十冊も書かなくてはならなくなりますからここには極大ざつぱに日本と違ふ所を述べませう。

三皇、五帝のお話からすると面白いが、その邊は時代や國の名前だけ書いて見ますと、五帝の次が夏、その次が殷、それから周といひます。一體支那は萬世一系でなく十系も二十系もなる國で王様の血統が變るたびに國の名前や都をかへていつたのです、王様が變ることは日本の將軍家の變るやうなものでした。將軍は天子様のお許がいりますが支那の王様は強い人が自分で王様になるから世話がないのです。支那のお話を聞く時には早くから開けてゐたこと即ち時間的に長いことや、王様の變り方が前にいつた通りであり、日本あたりと比較にならぬ位に廣い例へば一度に何十といふ王があつた事もある位だと知つてゐなければなりません。

周の二三代目が神武天皇の時代になりますから、その後で秦、漢、新、(後)漢、三國、西晉、東晉、南北朝、隋、唐、五代、宋、南宋、元、明、清、中華民國となつて今日に至つたわけです。

孔明とは三國時代の英雄の名で三國とは日本紀元の九百年前後

で、ちようど神功皇后の時代になつてゐるわけであります。この三國といふのは漢の王室が衰へたのに乘じて魏、吳、蜀の三國が天下を三分したことであります。も少し詳しく述べますと漢の王家は後になると外戚(王様のお母様の家)が威張りちらしたり、宦官といふ役人が我まゝをしたりして段々衰へて來ました。だから桓帝の時忠義な人達が宦官をやつつけようとしましたが、却つてその爲めに二百人餘りも獄に入れられてしまひました。そして靈帝の時百人餘は殺されました。そのどさくさの間に張角といふのが黃巾の賊といはれた謀叛をしました。ついで靈帝の太子辯が王

様になられますと袁紹が兵を進めて宦官二千人餘を一時に殺してしまつてその禍の原をたちきりました。その時董卓も兵をひきつれて都に來て辨を廢して獻帝を立てゝ自身は大臣となつて專横を極めたので關東の豪族は雲の如く起つて袁紹を總大將として董卓を攻めた。曹操、孫堅、劉備などいふ後に三國の王となる人たちも皆袁紹の方でした。董卓は都を長安に遷しましたが後でやつつけられてしまひました。

世の亂れに王様も逃げ出されましたので曹操はこれを迎へて許に都しました。が無政府狀態で袁紹は幽、并、冀、青の四ケ國を

領しその從弟の袁術も廣い土地と多くの兵士を持つて戰かつたが曹操は袁術を亡ぼし袁紹を破り劉表の子劉琮を降して揚子江の北をとつてしまひました。

孫堅の子の孫策もなか〳〵の武略家でありましたが早死をしたので弟の權が代つて立ちました。曹操は劉琮を降し劉備を追ひまくつて八十萬の大軍をもつて權を攻めました。が權は周瑜に三萬の兵をやつて赤壁で迎へ擊たせて大勝利を得ました。

劉備は袁紹にたよつてゐましたが後で劉表にたよることになりました。孔明はこの時、備の家來になつたのです。暫くすると劉

表は死んでその子劉琮は曹操に降參しましたので、備は吳の方に行つてゐました。所が操が赤壁でまけて歸りましたので備は荊州を取つて更に蜀に入つて成都に都して愈々三國といふものがなり立ちました。即ち曹操は魏、孫權は吳、劉備は蜀漢の王として鼎立することになりました。

◉西窓の書見……雨讀晴耕

三國の世には一藝一能あるものは誰でも自分をよく使つてくれる主君を求めてゐました。人々は皆名利のために良主を得ること

に汲々としてゐる時大才を抱きながら超然として深く山谷に隱れて少しも聞達をあせらず悠々と讀書をし自然を友としてゐる傑士がありました。これは餘程の人でなくては出來ないことで、又若し賢明な王者が認めてくれなければ谷間の櫻のやうに一向人の注意もひかないで一生を過してしまはねばなりませぬ。人物經濟上から言へば隨分損な話でありますが自分としてはそれだけの大きな所がなくてはなりません。が一體そんな高潔な人が人間社會にゐるかしら？いや我が諸葛孔明はその方でも有名な傑士であります。

孔明とは字で諸葛亮といふのがあたりまへです。亮は山東の瑯琊の人で漢の司隷校尉諸葛豐の子孫であります。お父さんの諸葛珪は早くなくなられたので、叔父の諸葛玄にたよつてゐました。叔父さんについて襄陽に居て弟の諸葛均と一緒に隆中に來て「雨讀晴耕」といつて晴れては畑を耕し、雨の日は讀書をして平和な日を送つてゐました。亮はよく梁父の吟をくちずさんでは自身を管仲樂毅に比較してゐました。今こそ悠々と雨讀耕晴をやつてゐますが希望はなかなか大きいものです。家の後に臥龍岡といふのがあるので自ら臥龍と號してゐました、その號の中にも大きな希

望が含まれてゐるわけです。

梁父の吟　　諸葛亮

歩して齊城の門を出、　遙に蕩陰の里を望む
里中に三墳あり、　纍々正に相似たり
問ふこれ誰家の塚ぞ　田彊古冶氏
力能南山を排し　文能地理を絶つ
一朝讒言を被むりて　二桃三士を殺す
誰かよく此謀をなす　相國齊の晏子、
これは齊の景公の家來に公孫接、田開彊、古冶氏の三人の勇士

があつた、それ〳〵手柄があるのでそれを鼻にかけて仕様がありませんでした。それを景公がしきりに心配されますから晏子が「三つの桃をおとりになりまして一つは王様(景公)がおたべになり、殘つた二つを三人の中の手柄話のよかつたのに一つづゝ下さいましたならば必ず三人は自分がいただかうと思つて初の中は爭ひませうが、次には讓り合つてとう〳〵おしまひには皆自殺しませう。たつた二つの桃で三人の勇士が殺せます。」と申上げました。そこで景公がその通りやられますと、田開彊と古冶氏が桃をいただくことになりました。そこで公孫接は一人殘つた事を恥入つて自殺

してしまつた。さうすると後の二人も公孫が可愛さうでもあり桃一つのために爭つた自分達を顧みて恥かしくもあるので又自殺してしまひました。それからこの話を奇計で以て勇士を殺す時の例にするやうになりました。

管仲は齊の桓公を助けて天下を統一させた人、樂毅は周の人で燕の昭王に仕へては齊の七十餘の城を降した程の知謀の人であります。知惠たらざれば王樣を恐れさすだけの勇士であつても桃二つで三人も殺されるし、知惠があれば王樣の先生にもなれる所に孔明は興味をもつてゐました。

孔明は崔州平、石廣元、孟公威、徐元直等と親密に交際していつも一所に勉强してゐましたが、この四人はコツ〳〵勉强するのに孔明だけは章句の末にコセ〳〵しないで大體の所を見渡して從容として膝を抱いてキョロリとしてゐました。或時四人に「君方はよく勉强するから知事さん位にはなれるだらう。」といつたので四人が「しからば君は？」と言ひました。所が孔明はたゞ笑つて答へませんでした。

劉備が壇溪の軍からにげて司馬徽の山莊を訪れた時、司馬徽が

「將軍は傑いお方だと聞いてから餘程たちますが、今もつて落魄ていらつしやるのは一體どうしたわけでせう？」と尋ねました。

劉備は「運がめぐつて來ないのとそれ程私が傑くないからです」と答へました。司馬徽は笑ひながら「いや〳〵將軍には能臣がおありにならないからだ。」

備「自分から申しては何ですが、文官には孫乾、糜竺、簡雍がゐますし、武術の方では關羽、張飛、趙雲がひかへてゐます。これ等が皆忠義をつくしてくれますので、人物がないなどとは申されますまい。」

徽「ウフ、……關羽、張飛、趙雲は一騎當千位ちやありますまい萬夫不當の勇者でせう。が今の世では勇氣一偏ではだめです、失禮ですが知と勇とをかねなくてはねェ、孫乾以下は白面の書生ポーで字は書けませうが天下國家を論ずべきものではございますまい。

備「私も賢能の士を前から需めてはゐます、がまだ殘念な事には見當りません。一體王佐の才のあるものとは如何な人でせう。」

徽「左樣、儒生や俗士では當世の時務を知りませんから、まあ時務を知つてゐる者は俊傑ですな。此地方に伏龍、鳳雛の二俊傑がゐ

ます。これならばどちらでも天下を平定するだけの力量があります。」

備「と申しますと誰でせう。」

徽「伏龍とは雲さへ起れば何時でも天に昇れる龍が伏してゐるやうなものですな、それは諸葛亮といふんですよ。鳳凰の雛にたとへられてるのは襄陽の龐統、字を士元といひます。」

劉備が新野にゐた頃、徐庶といふ男を手に入れて大喜びで軍師としました。そして徐庶は曹操の軍を破つたが、曹操は徐庶の母を捕へて庶を自分の方に招いたので止を得ず庶は備に辭職を申出ま

した。その時家來の孫乾は備に「徐庶は天下の才子であります。のみならず味方の事は何でも知つてゐますから敵の操の方におやりになつてはだめでございます。今辭職をお許しにならなければ操のセツカチが怒つて徐の母を殺すにきまつてゐます。そしたら徐は母の仇といふので一層操と戰ふことに忠義をつくすと思ひます。どうぞお許しになりませんように。」

備「お母さんを殺させて、その子を使ふのは人の道でない。孝行する邪魔は出來ない。自分はどんな目にあつても不仁不義の味方にはなれぬ。」とはねつけました。

徐庶はこの劉備の人間としての心、自分を思つてくれる恩義に感じいつて自分の後には諸葛孔明をとお勸めしました。劉備は「その男をつれて來てくれまいか」と庶にたのみました所が、「これは天下の大才物でございますから御自身でお出かけになりませんければなりません。とても膝をまげて來るやうな人物ではありません。將軍が御自身でお出下さい。」と答へました。

昔太公望が偉いと聞いて文王は自分の方に引き入れたいと思つて自身で出かけましたが、釣をしてゐた太公望は一日口をきかないので文王も後に立つて待つてゐました。呂尙—(太公望)はその文王の熱心さに感じてとう〳〵話してその請を入れたといふことであります。この有樣を面白く『釣れますかなど丶文王そばへ寄り』といつた人があります。この呼吸は人の頭に立つ人の忘れてならぬ所であります。

◙三顧の知遇……水魚の交

大夢誰か先に覺む、　平生我自ら知る
草堂春の睡足り　窓外の日遲々たり。

と、孔明が平生歌つてゐたといふのではチョツトのろまで役に立ちさうにもありませんが、「畑を耕してゐるのも自主の精神である自分にも萬里をかける羽はあるが梧のやうなチツポケな木ではとまれぬから木にもとまらないでジッとして天の時のめぐつて來る

のをまつてゐるまでだ。」等と歌ふ所には男らしさがあらはれてたのもしい所があります。

劉備は自分の尊敬する司馬徽から「孔明はよい」と語られ、自分の信頼する徐庶からも「孔明でなければ」と勸められてみれば孔明を一日も早く呼びたくてたまらなくなりました。

劉備は樂しみ勇んで孔明を訪ねられましたが會へませんでした。今度こそはこの熱心さによつても會はずにおくものかと思つて風雪を冒して二度目の訪問をされましたが、だめでした。仕方がありませんから自分の考をこまごまと認めて手紙をおのこしになりました。そしてやつと三度目に初めて對面といふので關羽、張飛などの勇士が喜ばなかつたのも無理はありません。しかし劉備は益々自分のものにしたいと言ふので熱心になります。一方孔明は自信が強いから容易に家來になりません。

三度目にやつと逢ふことが出來ましたので

備「私は涿郡のもので久しく先生の雷名を聞いてゐますので先達から二度まゐりまして名前も書いて差上げましたが御覽下さいましたでせうか。」

孔明「南陽の百姓はどうもヤクザ者でして……それだのに將軍

が態々お出下さることは感激にたへません。御手紙で將軍が國家、國民の事を御心配になる事の御熱誠を承知いたしました。しかし私は才能もなく年もまだゆきません青二才でお役にも立ちますまい。」

備「司馬徽、徐庶は人を見そこなひますまい。」

孔明「司馬徽、徐庶兩氏は立派な方々でございます。私はほんの百姓で何も存じません。お二人はきつと何かお考へちがひになりましたでせう。將軍はあの二方をおいて私に出るやうにおつしやつていただきますのは玉を捨てて石コロをお拾ひになるやうなものでせう。」

劉備は情なくなつてガツかりしました。そして「大丈夫の士が天下を料理するだけの腕をもちながら山林に老い果つのは勿體ない。是非一つ政治にたづさはつて人民を濟ひ、君をたすくべきものだと思ふが……孔子樣でさへも天下を巡つて教化されたのに……どうか私を捨てないで教へて下さい。」

孔明「アハ……では先づ將軍の御志を承つてから何とか申上げませう。」

備は左右の人を退けて進み出て「漢の王室が衰へて悪い家來が我

儘をして王様は都落をされました。出來るか出來ぬかは第二として大義を天下に訴へようと思ふけれど知惠も戰術も未熟なためにやりそこなひばかりして今日になつてしまつた。がまだ〳〵力のかぎりやつて行きたいと思ひますが、それにはどんな工合にやつたらいいでせう。」

孔明「董卓が亂をなしてから豪傑は雲の如く起つて州郡に割據するやうになりましたが、あの弱小な曹操が袁紹を亡しまゝたのも全く運がよかつたばかりは申されません。あれは謀で勝つたと思ひます。今の世の中に百萬の兵隊を持つてゐましても諸侯と爭

つたのではなか〳〵容易ではありますまい。吳の孫權は揚子江の東の方面をもつて既に三代目でありますし要塞堅固で人民もよくなづき賢能の家來もゐまして勢が大へんによろしいので、私はあの吳とはお互に平和主義で交際すべきで戰爭をすべきでないと考へます。荆州は北の方に漢水、沔水の險所があり南海の方に續いて東は吳會に連り西は巴蜀に通じてゐまして根據とするのにいい所ですが、しかしえらい人でなければ保てません。これは天が特に將軍のためにのこしておかれたものと申上げてよいと思ひます益州は沃野が千里もつゞいてゐまして高祖はこゝを根據として天

下を得られました。大守の劉璋は闇弱で漢中の張魯はノロマであります、目先のきく人々は皆明君の出るのを待つてゐます。今将軍は王様の親家で信義は世の中にかくれもない事であり、よろこんで賢能の人をお使ひになりますから若し荆州、益州をおさりになりまして西國の方ご和して南を従へられて孫權ご交を結び政治をよくしてお出になりまして、天下の變亂の時は良將に荆州の兵をつけて宛洛に向はせて御自身は益州の兵をつれて秦川からお出になりましたら人民は皆將軍を大歡迎いたしませう。そしたら將軍は王様ごなられ漢の王室の再興も出來ませう。どうかそん

な工合におやりになりましては……」

備「なるほど〳〵、そなたのお話は雲霧をおしのけて青天をみるやうに、よくわかりました。どうかこゝを出て私を佐けて下さい。」

孔明「いや、私は百姓ばかりしてゐまして、世の中の事は一向わかりませんのでだめです。」

備「そうおつしやらずに……そなたが出てくれなければ漢の天下はおしまひでせう。」

しきりに求めてやまない備の熱心に孔明も動かされて、「將軍もし私をおすてにならなければ犬馬の勞をとりませう。」といつてこ

う〳〵備の家來になりました。その時が亮は二十七才でした。

備は新野に孔明をつれてかへつてから一日一日とよくするやうになりました。家來とは見られない位に待遇して食事の時は同じ卓にする〳〵寢る時も近くに寢るといふ位でした。關羽、張飛等千軍萬馬の間に往來した人々はこれを喜ばないで、孔明は乳臭い青二才ぢやないか、たとひ才學があつても余り待遇がよすぎると怒りました。備は笑ひながら、「わしと孔明は魚と水のやうなもので な。」といつたので魚は水がなければ死ぬからつまり命と同樣だといふので關羽も張飛もあきれかへつて默つてしまひました。

漢の王室はあれどもなきが如くで衰弱の極に達してゐて人々はこの世を救ふ英雄の出ることを待つてゐる時に曹操は王樣を自分の所にいただいて諸侯に號令してゐます。知謀のある人々がその旗下に集つてゐるので容易にこれをやつつけるわけには行きません。又孫權は地の利と人の和を以て既に三代を經たものでありますれば、これも容易に亡すわけにはまゐりません。孫權の下には周瑜とか魯肅とか賢能の家來がゐて彼の明敏を助けてゐますから大國とはいへませんが侮りがたい勢があります。先づ進んで天下

をとるだけの力はなくとも自分の所の江東を守るだけには十分の力があります。孔明がこれと和するといつたのは何でもないことのやうで實は見識の高い所です。荆州と益州とも併せて天下の變を待つべしといふことも此の場合の上策であります。天下三分の謀は誠に見上げた考でありますが孔明は三分の計を終局の目的とは思つてゐませんでした。目下の形勢からして三分の計よりしかたがありませんが、最後には天下統一したいといふ大目的がありました。しかし劉備が正直すぎたのと片腕になつてゐた龐統が若死したために天下統一は出來ませんでした。三度訪ねられるまで出なかつた孔明も一度出ては粉骨碎身誠忠をつくすことを忘れませんでした。

孔明を迎へた頃の劉備は實に困りぬいてゐました。僅かに荆州の劉表にたよつて新野の小城に籠る位でありました。所が曹操は既に中原を席捲して天下をとつたやうな氣持でゐます。此際劉備は早く荆州をとつて東の孫權と聯合して操を防がねばなりませんが、備は劉表に恩をうけてゐるのでその國を奪ふことに忍びません。表が死ぬ時に長男の琦をおいて次男の琮に位を讓りまし

た。操は備がまだ勢を得ない前に荊州が譲位の事にゴタ〳〵してゐる時を見はからつて百万の兵をつれて稲妻の様に攻寄せて來ました。戰爭をするのに機先を制することがうまいので、琮はとてもかなはないと見て操に降參しました。備は久くしてからこの事を知つて怒りましたがもう遲い。備に早く琮を攻めて荊州をとれと勸める人がありましたが、備は恩人の子供を攻めては表に申譯がないといつて操の軍を避けてしまひました。孔明は計をもつて操の先鋒を破り新野城を燒いて曹仁をやつつけてみましたが大勢はどうともすることができません。敏捷な操は備が江陵によつては面倒と晝夜兼行で疾風の如く江陵に向ひました。備が當陽の長坂にいつた頃は操の大軍が山野をおふてゐましたので九死に一生のハメに陷つて妻子もすてゝやつと逃げました。趙雲がよく戰つて備の子劉禪を助け、張飛が決死でもつて川の所で橋を落してその後を防ぎましたので、やつとの事で逃げのびました。その位だから江陵によることができず辛じて夏口ににげていきました。

曹操はこの調子で荊州を併せ劉備を破り破竹の勢で天下を統一しようと考へました。先づ孫權に手紙をやりまして

操、近頃勅命をうけて罪人を征伐してゐるが一度旗を南に向け

ると劉琮はすぐ降參しました。今百万ばかりの兵隊を持つてゐますから將軍と東の吳あたりで雌雄を決して見ようぢやないかといつてやりました。權の家來はドキモをぬかれてしまひました。劉備は追ひつめられ孫權はおどかされて絶體絶命になつてしまひました。孫權は魯肅をやつて備の樣子をさぐらせました。孔明は「これは大變だ、孫將軍の救を求めなければなりませんといつて魯肅と一緒に吳へいつて三寸の舌の力でこの勢をひきかへさう。」と備にいそいでおねがひしました。

所が吳の國では武臣達は主戰論をとなへますし、文臣達はまけるにきまつた軍はせぬがよいといふので中々きまりません。孫權も降參はしたくなし勝つ見込はたゝないのでグヅ〳〵してゐます孔明はこの所を見て是非とも吳を說きふせて魏と戰爭させてその後でともかくも計をきめねばなりません。孔明の任務は實に重大であります。

孔明が吳に入るといふので孫權は文武百官を集めて人物の多いことを見せました。文官の頭領の張昭は孔明に向つて「昭は東吳の末將でありますが君の評判を久しく聞いてゐます。君は隆中にゐて管仲樂毅と同じと自信してゐられたと、本當ですか。」

孔明「それはもののたとへです。」

昭「近頃劉備將軍が三度も訪ねられて今では水魚の交を結んで得意になられ荆州を手に入れるといつてをられたと聞きましたが、曹操のために取られたのは一體どういふわけですか。」

孔明「我君は仁義の道を行ふて同宗の國を奪ふに忍びないからとらなかつたばかりだ。しかるに劉琮は弱いので小人の勸めに從つて曹操に降參してしまつたのである。だから今我君は江夏によつて別な謀をしてゐます。これは凡人の知る所ではありません。

昭「それでは君の言行は全く矛盾してゐるといはねばなりません。

君は自分から管仲樂毅に比較してをられたが彼の管仲は桓公を助けて天下を統一し、樂毅は微弱な燕をたすけて齊の七十餘城をとつたことは知らない人もない事で二人とも世をすくつた英雄ぢやありませんか。今曹操は中國に横行して王様をおしたてゝ四方を平げて諸英雄を從へて居るのに君は隆中にかくれて風月を樂しんでをればそれまでゝあるが、いやしくも出て劉備を助けられる以上は必ず漢の王室を興し曹操を亡ぼし人民を苦しみから救ひ上げて下さるだらうと待つて居たのに、何です曹操の兵隊が來たといへばアワテて甲をすて戈を落して逃げ廻り新野を占領ちれて樊城

にのがれ當陽に敗れ夏口ににげて一身をかくす所さへなくなつたではありませんか。一體劉琮をたすけて荆州を守ることが出來ぬといふのは之を知らぬならば知惠なしでせう。もし知つてしないならば不仁だと思ひます。劉備將軍は君が居ない頃は一城をもつて一州を根據にして天下に重きをなしてをられたのに、君が來てから敗亡又敗亡て眉を焦すやうな苦しみにあつてゐられるぢやありませんか。昔の管仲樂毅はこんなものぢやなかつたでせうに。」

孔明「ワハヽ……燕雀には大鵬の志はわかりますまい。劉將軍は今は重病人のやうなものである重病には粥をやつて藥をのませてからでなくては肉や強い藥はやられますまい。先に我君は汝南にまけて劉表にたよられた時は千騎たらずの兵隊で大將としては關羽、張飛、趙雲がゐたばかりです。新野は山間の僻地の小さな城で人民も糧食も少いのでやつと居るだけで例へば重病人の如く強い事は出來ません。城もなつてゐないし兵隊も訓練が出來てゐないのに無理に守ることは自殺するやうなものです。まして博望坡に屯を燒いて白河の水を使つて夏侯惇曹仁等も我名を聞けば膽を失つて恐れる。考へてご覽なさい管仲や樂毅でも是以上の事は出來ますまい。殊に劉琮が曹操に降參したのは我君の少しもご存

じない所です。又ドサクサまぎれに同宗の根據を奪はなかつたのは大義といふものです。當陽の敗軍は十万に餘る人民が我君になづいてゐるからその愛にひかされての事であるからこんなのを大仁といふものです。兵數が比較にならぬ位少いので何時も何時も勝つわけには參りません。昔高祖は項羽と戰つていつもまけてゐられたが垓下の一戰で之を滅されたやうなもので、國家の大計になると最後が大事で小さい事はまあどうでもいいものです。口先ばかりでは國家の事はわかりません。」

今度は虞翻が進んで「今曹操は百万の兵を以て將に夏口を呑まうとしてゐるのに君はどうなさるおつもりですか?」

孔明「曹操は河北を平げて袁紹が蟻集の兵を收め荆州を攻めて劉表が烏合の衆を得たつて軍紀も謀略もないものだから何百万あつても恐るゝにたらぬと思ひます。

虞「アハヽ……當陽では死にそこなつて、夏口では百計つきて人の國に救を求めて居ながらまだ恐れぬといふのは耳をおふて鈴を盗むやうなものぢやわい……。」

孔明「我君は數千の仁義の兵を持つてゐますが何しろ操の百万の暴兵にはかなはぬもんだから暫く夏口を守つて時の至るのを待つて

居ますがね、今吳の國は兵精しく兵粮足つてゐる上に長江の險もありながら君に勸めて逆賊に降參しようとする其卑怯なのはお話になりません。これに比ぶれば劉將軍のやうなのは全く曹操を恐れないものといはねばなりません。」

翻は言葉つまつて退いたので色々の人々が樣々な事をいつて孔明を辯難しようとしましたけれど孔明の雄辯にまかされてしまひました。黃蓋「孔明は當世の英傑である。君等無駄口をたたくのはお客樣に對して失禮であらう。國家危急の場合に無用の言をなすひまはない。早く殿樣に申上げねばならぬといつて魯肅と共に

孔明を案內して孫權の所に行きますと權は座を立つて迎へました孔明は一目見て碧眼紫髯で儀表堂々たるもので普通の殿樣ではないこれは一つ怒らせなければ自分の思ふ通りに行かぬと見てとりました。魯肅は主戰論の頭目でありますから孔明が曹操の强い所を話して孫權を恐れさせはしないかと氣遣うて前以て氣をつけてはおいたがどんなかと思つて堅唾をのんで控へて居ります。

孫權「度々魯肅から足下の大才を聞いて居ましたが今幸にあふ事が出來ました。足下は近頃劉將軍をたすけて曹操と戰はれた話だが必ず敵の虛實を知られたでせう。」

孔明「我君は兵少く將たらず殊に新野は城が小さくて糧食も乏しくとても敵と戰ふ事が出來ませぬ。」

權「曹操はどの位の兵數ですか。」

孔明「曹操は兵を起してから呂布を破り二袁を滅し今又荆州を合せましたから百万以上になりませう。」

權「それはチト多過ぎはしませんか。」

孔明「外臣何のためにうそを申上げませうや。曹操が兗州にあつた時既に四五十萬の兵をもつてゐましたのに袁紹を滅して又四五十萬をとり近頃中國で新に募つたのが二三十萬で今又荆州で二三十

萬手に入れましたから水陸の大軍百五六十萬を下りますまい。百萬と申上げましたのは東吳=この邊の人が膽を潰してはいけないと思つたものですから。」といふので魯肅はそばにゐて顏色を失ひました。

權「今曹操は荆州をとつてもなほ遠くとるつもりだらうか。」

孔明「曹操は今揚子江に沿つて陣をとつて兵船を用意してゐます。あれはあなたの國より外に目指してゐません。」

權「それでは戰爭したものでせうか。それとも平和主義がいいか君の御意見を承りたい。」

孔明「曹操は中原の全力と新に荆州の水軍とを併せてますから破竹の勢で、とてもどんな英傑でも手のつけやうあありますまい。だから我君も戰敗れて夏口に逃げてゐます。將軍御自身のお力をお考へになりまして江東の兵で勝敗を決しようとのお考へでしたらお戰ひになるし、とてもだめだと思召したら多くの人がお勸めするやうに甲をぬいで膝をまげて北面して降參をなさるがいいでせう。」

權「……」

孔明「將軍はこの焦眉の急にあたつて操と戰ふ勇氣もなく、又降參する事も出來ずにえきらぬ態度でお出になりましたら大變なことになりはしますまいか。」

權はツンとして「君のいふ通りならなぜ劉將軍は降參しないのですか。」

孔明「我君は凡々者とは少しちがひます。昔田横は一壯士でありながら義を守つて恥をうけませんでしたのに、我劉將軍は王室の流れであり、英才高く萬民はその德になづいてゐます。勝敗は時の運でございますから負けたからといつて決してすぐ降參などはいたしません。」

孫權は怒つて卓をたたいて「自分は父兄の業をついで江東十万の兵をもちながらどうして降參しようか、よろしい。劉將軍と聯合して逆賊を討たう。しかし劉將軍はまだ敗れたばかりで大敵がふせげるかしら。」

孔明は權の怒つたのを見て思ふ通りになつたと喜んで色を正して

「我君は當陽でまけましたが既に兵隊は集つてゐます。この外に關羽が水軍を一万と、劉琦が江夏の兵を一万もつてゐますから、曹操の大軍は長途につかれてゐます上に北國の者は川になれませんし、荆州の兵は心服してゐませんから、もし將軍が我君と聯合

なさいまして猛將に命じて數万の精兵で操に當られましたら勝ちにきまつてゐます。操がまければ東吳の勢は強くなりますから鼎の足のやうに三方が平均的になりませう。この一戰にやつつけてしまはなければなりません。將軍よくお考へ下さい。」

權は大に喜んで共に操をうつ謀をこらしました。これが、有名な赤壁の戰になります。赤壁の戰は大變面白い話でありますがむしろ吳と魏の活躍が多いからこゝには愛割〜ます。(附錄として卷末に入れませう)これで愈三分の實は定まりました。

孔明は吳の學者達と舌戰して、孫權を怒らせて「月明かに星稀れで、烏鵲南にとぶ、樹をめぐらす三匝　枝なくしてもよるべし山は高きをいとはず　水は深きをいとはず　周公吐哺　天下の心歸す。」と得意に歌つてゐた曹操に泡をふかせてしまひました。この赤壁の戰は周瑜以下吳の忠臣の苦心は筆紙につくされませんが、これはひとり吳のためばかりでなく劉備の方も大いに助かりました。

赤壁の戰の後で劉備は孔明の計によつて荆州、南郡、襄陽の三城をとり四郡を合せて劉琦に荆州を守らせました。この時は吳の頒分になるはずでしたが元の王樣の劉表の長子の劉琦が居るので名分上吳は故障がいへませんでした。それから孫權は妹を劉備にお嫁さんにやりましたので備が吳の國に來ました。その時面白い事を周瑜が權に申上げました。

「劉備は強い上に關羽。張飛のやうな恐ろしい大將や孔明のやうな參謀をもつてゐますから何時迄も今のやうにはしてゐますまい今の中に宮殿を造つたりお庭やお池で遊んだりお酒をのませたりして耳目を樂しませて、關羽や張飛と仲惡くし孔明との間をたち

きつておいて攻めれば容易でございますが、このまゝにしておきましたらどんな事をやり出すかわかりません。」と

權はこの計を用ゐませんでした。赤壁で勝つには勝つても天下の十分の七は魏のものですから恐ろしくて味方の劉備を殺すことは不利と思ひました。しかし周瑜は何といつても曹操は負けたばかりで今すぐ出てくるわけには行きませんから、その中に備を亡してまとめておいて操に當るならば二つのものが聯合してかゝるよりも強いと思つて計を考へてゐました。けれども瑜は病氣になつて三十六才を一期としてなくなりました。瑜は先づ備を討ち

操をたをして天下統一を考へてゐましたが權は安全第一と大事をとりましたので三分で滿足しました。

曹操が弱つてゐる間が小國の活動する時でありますから周瑜は色々と孫權に勸めましたが若くて死にました。劉備はまだ根據地のない風來者、早く足場を作らなければ自滅しなければなりません。孔明は日夜この事ばかり考へてゐました。荆州は守りにくい土地であり巴蜀は攻め難い國でありますから孔明一人ではこの二の難事が出來ません。誰か片腕になる人が欲しいと思つてゐた時でしたから吳に周瑜の吊ひに行つて龐統をつれて來ました。統(字

は士元)は襄陽の人で孔明の學友であります。司馬徽が伏龍鳳雛といつた一人の鳳雛の方ですが一寸見ると色の黑い鼻のひしやげた眉のバカに厚い男で堂々たる風采の孔明とはくらべものになりません。長らく吳にゐましたが力量を認められる位置におかれませんでした。吳の魯肅でさへ同情して劉備のやうな明君に仕へたがよいと勸めた位でした。統は孔明と肅の紹介狀をもつて荆州に入つて劉備をたずねました。

統が荆州に來た時は孔明は四郡に巡檢に行つてゐたので備が直に引見したが横柄な顏して風采も揚らなかつたので來陽縣を治めることにしました。統は二通の紹介狀をもつたまま來陽縣に行つて遊んでばかりゐましたので評判が惡くなりました。そこで張飛が巡檢に行つて見ますと出迎へもしませんので短氣な飛は統をしばつてしまはふと思ひましたが、一緒にゐた孫乾が「まあ〳〵」とめました。役所に入つてみますと統は醉つぱらつて出て來ました。飛が何ぜなまけるかと責めますと「何、こんな小さな縣は毎日するだけの仕事はない」といつて百日分を飛の目前で半日にかたづけてみせました。そして「僕からみれば曹操も孫權も子供のやうなものだ」といひました。飛は驚いてあやまりますと統は魯

肅の手紙だけをみせました。飛が「早く見せてくれれば……」と申しますと統は「何に、信じてくれるまいと思つて。」と平然としてゐます。この話で備も驚いて魯肅の手紙を見ました。それには大才物だから國の要職におくやうにと書いてありました。後で孔明が歸つて來て愈統の人物がわかりまして副軍師中郎將とされて孔明と並び用ゐられました。そこにも孔明のやさしい人となりがうかがはれます。普通の人ならば自分が王樣から可愛がられてゐれば自分と同じやうな人をつれて來ようとしませんが國のためを思ふ眞心と友情からして統のやうな大人物を自分からさがして

來ました。

益州の劉璋は漢中の張魯に攻められる事を恐れて張松を使として曹操と仲よくしようと申入れました。曹操は松の短軀で風采の揚らないのを見て傲慢でありましたから松は怒つてかへりましたかへりに荆州で劉備にあつて優待されましたのですつかり備に感心してしまつて「荆州は背と腹に敵を受けてゐる上に守り難い土地でありますが、益州は沃野千里民富んだ天惠の地であります。が劉璋は闇弱で智能の家來は皆明君の出られるのを待つてゐますなぜ益州をとつて王樣におなりになりませんか。」と申しました。

備は、「劉益州も漢の王室の宗親だからとるにしのびないさ。」と松「私は賣國奴ではありません。先づ巴蜀を領して次に漢中をおとりになつてから天下に打つてお出になりましたら統一が出來ませうに、細節のために益州をあのまゝになされば外からとる人が必ず出ます。先んずれば人を制すと申しますから、はやく御決心になつた方がいいでせう。」と巴蜀の地圖を備にかしました。松の友達の法正はこの話を聞いてわざ〳〵備にこの事を勸めに來ました。

龐統も劉備に勸めましたが備は「劉璋は何も憾みがないから攻めるわけにいかぬとどこまでも正義と平和のために動きません。統は「議論は議論、殊に亂國の世にそんな事は却つて通用しません。自衛上益州をとらなければ吾々は滅びます……」と勸めてやみませんので備は孔明に荆州を守らせて統を軍師として益州に攻め入りました。

益州に入つて軍紀を正し人民をなづけてゐますと曹操と孫權が濡須で戰爭してゐるといふ噂がありました。備は荆州を心配しました。どちらが勝つても荆州をとるに違ひない荆州は守りにくい所だがと心配しますが。統は大丈夫孔明がある間は誰が來ても取ら

れません。それよりも益州を早くとりませう。」と申しました。璋の方には鄭度といふ名將が居て持久戰で備を防ぐことを申出ましたが璋は卑怯だといつてこれを用いませんでした。實は備は鄭のことを恐れましたが璋はそんな目先のきく人でないと法正が話したのでどうかと思つてゐますと果して妙計は用ひられませんでした。所が惜しい事には統が流矢にあつて三十六才を一期として戰死したことです。このために備は困つてしまつて孔明を呼びました。孔明は力を落して「大變な事になつた、惜しい事をした、行けば後が心配だし、行かなければ益州が氣になる……」と、關羽に荆州を守らせて出發しました。孔明は關羽の勇氣には感心してゐますが勇氣だけで戰爭は出來ませんから智謀の方が心配で曹操と孫權と同時に攻めて來たらどうしますと羽にきいてみました。羽は兩方共防ぎますと答へましたので孔明はそれは出來ない相談です「北の曹操を防ぎ東の孫權と和せよ。」と敎へました。

孔明は張飛を巴郡から攻入らせて自分は趙雲を先鋒として舟で蜀に入りましたので璋は張魯に救を求めました。張魯は馬超をやつて助けさせましたから孔明は李恢をやつて利害關係を話して超を降參させてしまつて遂に璋を降して益州も愈々備のものになり

ました。

關羽は馬超がバカに強いと聞いたので角力を申込ました。孔明は手紙で「超は強いのは強いが野蠻人の蠻勇である。又美髯公(羽)の絶倫の力にはかなはない、君は今荆州を守りたまへ、その方が余程大事だから。」といつてやりましたから羽は髯を握つて失笑しました。孔明にあつては天下の豪傑も子供あつかひにされても喜んでゐます。

孔明は巴蜀を嚴格な法律で治めましたので法正などは餘り嚴しすぎて人民が失望するだらうと申しましたが、孔明はダラシのない政治の後は綱紀肅正なければなりませんと教へました。實際を見ますと五風十雨とでもいつたやうなぐあひに恩威よく並び行はれました。

曹操は漢中の張魯を攻め滅しました。司馬懿はその勢に乘じて蜀をとらうと勸めましたが、軍馬がくたびれてゐるといふので操はやめました。備の方でも攻められることを恐れて權に荆州の三郡をかへして早く魏を攻めるやうに申出ました。權はやつてみましたが魏軍のために散々な目にあひました。操は漢中に夏侯淵をおいて自分は魏にかへりました。留守に備は法正の計で夏侯淵

を亡して漢中をとりました。操が援軍をつれて來ましたが既に後れましたので長安に廻りました。備はいよ〳〵漢中を平げたので漢中王の位につきました。

三國鼎立が希望通りに出來た備は荆州益州漢中を併せて大によろこびました。

◉二代に忠す……白帝城の對話

曹操は孫權に手紙をやつて聯合して荆州を攻め取らうとしました。關羽が怒つて反對に魏軍をやつつけて一時は魏の都さへ心配される位になりました。が羽の油斷を見すまして權の家來が俄に攻めて來て荆州をとつたのに、操の家來も羽を攻めたてましたので羽は遂に戰死してしまひました。羽は義に厚く部下を可愛がる勇將でありましたが惜しい事には元氣がありすぎて謀でまけました。この人に荆州のやうなむづかしい所を守らせるのは無理ですが適當な人がなかつたのです。また王平のやうな智將を守らせたらよろしかつたといふ後世の學者もあるやうですが、この場合は己を得なかつたでせう。このために折角頭を上げかけてゐた備が失敗することになりました。それは自分の手足の如く信賴して

ゐた羽の敵を討ちたいと思つて却つて大敗したことです。考へ深い備でも怒りにまかせては無謀の事をして負けてしまひました。

建安二十五年に魏王曹操が洛陽で薨じますと子の丕が位について漢帝を廢して自分が皇帝だと稱しました。劉備はこれをきいて漢帝におくりなをして自分も皇帝の位について章武と年號を改め孔明を丞相（大政大臣のやうなもの）にしました。四百年もつづいた漢の王室も足利幕府の滅亡のやうに何時とはなしに部下のために滅されたといふよりも自分から衰亡しました。

備は關羽のために權にしかへしをしたくてたまらないでゐます

趙雲が「曹丕は勝手に漢の王室をやめて自分で王といつてゐるのでこれを討つならば忠義の人々が走集つて正々堂々と戰爭が出來ます。魏を亡せば吳は攻めなくとも降參しませう。それだのに丕をそのまゝにしておいて權を攻めましたら何時までもかゝりませう。天下の事が重くて部下の仇は輕いではありませんか、小義のために大事をあやまるのはいけません。」と申しましたが、備はきいれません。外の家來がいつてもききませんから孔明達は連署して切諫しました。所が備は怒つてしまつて「先に關羽と生死の誓をしたのに仇を報ぜないならば萬里の江山も貴くはない。既に

決心してゐる。」といつて七十万の兵を以て吳をせめました。

出征しようとするとき張飛はその家來の范彊、張達のために殺されました。二人は飛の首を持つて吳に降參しました。一體飛は男らしくて參謀に向つてはよくしますが部下に對しての同情心がたりませんでした。それで心服した部下がないので備はかねて戒めてゐました。備は飛の陣から急報が來たといふので讀まない前に「あゝ飛は死んだな。」といひましたが果してその通りでした。備は益々怒つて吳を攻めました。備の軍は七十里に亘つてゐるのに吳の軍のために四十四ケ所に火をつけられて陣が長すぎて連絡

がとれませんから、めちやくちやに負けてしまひました。備はやつとの事で白帝城に逃込みましたが七十余萬の兵は殆んど全滅しました。備は諫めた將士に對して恥かしいといつて成都にかへらないで、白帝城を永安宮と改めてここにゐることになりましたが遂に病氣になつてしまひました。

劉備の病氣が重くなりまして急使が孔明の所にまいりましたから、孔明は太子の劉禪を成都にとめて弟の劉永、劉理の二人をつれて病床に拜伏しました。備は孔明を床上に坐らせて手づから其脊をなでて「おかげで既に帝業が出來た。が考へがたりないで皆

の諫めをきかないで大敗してしまつて、面目なく成都に歸れなかつたが命が旦夕に迫つたので後事を託しようと思つて呼んだわけである。」といつて傍に馬謖が居たので人拂をして

備「馬謖をどんな人物と思ふか。」

孔明「當世の英才でせう。」

備「いや〳〵あの人は言葉が何時も實際よりも過ぎてゐる。必ず大に信用してはいけない。」

といつて遺詔を認めて孔明に渡しました。

そして「本は餘り讀まないが鳥の將に死せんとするや其聲かなし

人の將に死せんとするや其言よし位は知つてゐる。自分は殘念ながら天下統一が出來ないでしまつたがこの遺書を禪に與へて、しつかりやらせてくれ。」

孔明が地上に拜泣してゐるので、おそばの人に起させて床上に坐らせて其肩をなでながら涙をながして「一大事をいひたい。君の才知は曹丕の十倍もあらうから天下統一が出來るに違ひない。太子の禪は見込があつたら助けてくれたまへ。しかしどうしてもだめならば君が蜀の王となつて治めてくれ。」と備が熱誠こめていはれますので孔明は地上に拜泣して恐入つてしまひました。そし

て「死力をつくして太子の手足となつて働きます。」と答へました
備は又孔明を床上において二子を招いて「兄弟の者、皆丞相をお
父さんと思つて事へなさい。」といはれました。孔明は感激してい
ふ所を知らず「知遇の恩に報いるは一死あるのみ。」と誓ひました
備は李嚴達に太子を丞相にたのんだぞ、この望にそむかぬやうに
してくれ。」趙雲にも「永いこと苦樂を共にしたが愈別れる時が
來た。どうか子供達をたのむぞ。」雲も地上に拜泣しました。備は
百官を顧みて「一々挨拶も出來かねる……皆よく達者でゐてく
れ。」といひをはると六十三才を一期としてなくなられました。(章

武三年四月二十四日)

孔明等備の棺を守つて成都にかへつて劉禪を王位につけて建興
元年と改元した。禪はまだ十七才だから萬事は孔明がすることに
なりました。

遺詔

朕初め病みついた時は下痢ばかりであつたが、色々雜病が起つ
てとてもだめになつた。人生は五十といふから六十才余まで生
きたので不足はない。ただ卿兄弟の事が心のこりである。之を
勉めよ之を勉めよ。悪は小さくてもしてはならない。善は小さ

いからといはずにしなければいけない。これ賢、これ德、以つて人を心服させねばならぬ。卿が父は德薄うして手本にはならない。卿は丞相と事に從ひ之に事ふる事父の如くせよ、怠るなかれ、怠るなかれ、汝兄弟更に聞達を求めよ、至囑、々々。」

これは禪のための遺詔でありますが責任感の強い孔明のためにも、どれだけの力強いものであつたか知れません。孔明は「これで先主の知遇に報じたのか。」といふ聲が何時も自分の耳をはなれなかつたか感が彼自身を鞭撻しました。

魏の曹丕は備が居なければ安心だと大喜びで蜀を攻めようと思つて居ますと、賈詡が諫めて「備は死んでも孔明が居るから、めつたな事は出來ません。」といふと司馬仲達が笑つて今が乘すべき時である五十萬の大軍を五路に分けて攻め立てれば孔明がえらいといつても手も足も出まいといひましたので丕は大喜びで出兵を命じました。

蜀の國ではこれを聞いて上を下への騷ぎであはててゐます。孔明は役所に顔も出しませんから禪は心配でたまらず、家を訪ねて謀を聞かれました。孔明は池に魚を眺めてゐましたが王樣がお

出になりましたので恐縮して「臣は先帝からのお言葉がございますから一刻もお忘れはいたしません。池に魚をみるのも少し考へがありますことで……五路から攻めて來ましても軻比能の方には彼が神威將軍といつて恐れてゐる馬超に計を授けて西平關を守らせてゐますから大丈夫でございます。孟獲は地利をよく知りませんから魏延に疑兵の計を行はせて置きました。孟達は蜀の者で己を得ず魏の方に行つてゐますが、李嚴と生死の交をしてゐる者でございますから今嚴から手紙が行つてゐます。曹眞の方は趙雲に計を授けて要害を堅く守らせてゐますから四路の方は一寸も

心配ございません。殘る一つの孫權は丕から何度もいぢめられてゐますから自分から先に立つては來ますまい。四路が勝てないと知りましたら樣子を見て動きますまい。しかし辯舌の者をやつて利害を話して和を結べば尙いいんですが適當な人がゐませんので今池のほとりを散步しながら考へてゐますが、まだ考へが浮びません。」と、王樣はこれを聞いて大にお喜びになりました。

或日鄧芝に孔明が魏と吳とどちらを先に攻めたがいいかと尋ねてみました。「芝は魏は逆賊でも强いからめつたな事は出來ません今王樣がお若いので人民が不安を感じてゐますから吳と聯合して

先君の怨をすてた方が長久の計でせう。」と答へましたので孔明は大喜びで芝を吳にやつて權を說かせました。

權は强大な魏を向にまはして貧弱な國而も幼弱な王樣の蜀と聯合するのを心配しましたが芝が權の力と孔明の知と聯合して吳の三江、蜀の山川の要害で守らば三國鼎立が出來ますが、今のやうに魏の家來分となられましたら太子を人質にやれ、やらぬならといつて攻めて來ませう。その時蜀も前の怨みでお國を攻めたらどうなさいます。」といつたので蜀と和して魏と離れました。

丕は權が蜀と結んだと聞いて怒つて司馬仲達の計で吳を攻めましたが、あべこべにやつつけられてしまひました。

今迄江を渡つて戰つた場合には勇武な權でも魏の人々に苦しめられましたが、反對にこれによつて守れば魏の大軍が來てもびくともしません。地の利といふことは昔から戰爭の大事な眼目となつてゐるのはこのためです。」

◉七擒七縱……無敵の戰術

建興三年の春、南蠻王の猛獲が蜀の南を攻めて四郡をさはがしました。孔明は自身で征伐に出かけやうとしましたが王樣が吳、

魏が孔明の留守を見て襲ふことを恐れて容易に許しません。孔明は吳は同盟したし、でなくても李嚴が白帝城を守つてゐるから大丈夫であり、魏は新に負けたばかりで餘力がない上に、こちらは馬超が漢中の要害にゐるので恐るるにたりません。萬一の場合には關興、張苞の二人が豫備になつてゐますから、今が一番いい時だから南蠻を平げて後顧の患ひをなくしてから魏を亡ぼして先帝の御恩の万一に報じたいと存じます。」と申しました。王連が南蠻は不毛の地で丞相が自から行くだけの土地でない上將を一人やつたらいいだらうと諫めましたが孔明は片田舍で攻めにくいからといつて自身で出征しました。

孔明が四郡を平定した時、馬謖が勅使として慰問に來ました。孔明が南蠻を討つ方法を相談してみますと、謖は「南蠻は國遠く山險しくて攻め難いのをたのんで昔から王化に服せない、今日之を破つても明日は又叛く、今丞相が之を伐つたら勝つにきまつてゐますが、都におかへりになる頃は必ず叛きませう。若し殺してしまつては仁者の軍といはれません。一體用兵は心を攻めるのが上等で城を攻めるのは下等の部と思ひます。丞相はどうか心服させて久しく德になづいて、そむかぬやうにして下さい。」といつた

ので孔明は感嘆して「なる程。」といふので謖を參軍としてこめおいて南蠻に攻め入りました。

第一回の戰爭で猛獲をいけどりにしましたら、獲は「我あやまつて汝の奇計におちいつたが、心から感心はしてゐない。」といつたので孔明は逃してやりました。諸將が何のために敵將をお逃がしになりましたかと尋ねますと、「何、袋の中のものをとると同じだ、いつでも彼は捕へられる。」と答へました。獲は瀘水に陣したので孔明は兵糧を奪つて又捕虜にしました。獲は「何、自分の部將が叛いたためで汝がえらいからではない。」と横着なことをいひま

すと、又にがしてやりました。今度は、ようく陣營を見せて「こんなに精兵と兵糧が澤山あるからだめだぞ」といつて逃がしてやりました。獲は陣に歸つて弟の猛優を僞つて孔明に降參させて內外から攻める計をして三回目の捕虜となりました。それでも「弟がだめだからこんな事になつたので、まだ感心は出來ない。」といつたので更に逃してやりました。孔明は諸將に向つて「先に彼に陣營を見せたのは夜襲に來るやうにしたので、今逃したのは彼を心から服させたいばかりだ、どうか諸君も國家のために骨折つてもらひたい。」といつたので諸將は喜んで「大公望以上だ」とほめ

ました。孔明は「これは諸君のおかげで。」といつて謙遜しました。

獲は四回目の捕虜となりました。孔明も怒つてしまつて斬らうとしますと獲は少しも恐れてゐませんから又逃しました。獲は山の洞穴にかくれましたので蜀軍も攻めるのに苦しみました。もう歸らうといふ人もある位でしたが、孔明は「ここでやめては何にもならない。」と攻めつづけました。敵は部下がとてもかなはないと思つて獲を縛り上げて降參しました。獲は「部下が悪いからまけたので汝がえらいからでない。」とまだ毒舌をはきます。「それではしつかりやつてみよ。」と又縱ちました。五回目には負けたので降參したふりをして孔明を殺すつもりで捕虜になりました。今度は「何自分から來たから擒になつたんだ。」といふので又縱ちました。獲は遠い烏才國にかくれて火攻めにあつて殆んど全滅してしまひました。孔明は獲の縛をといて酒をのませて「逃がしてやるが、いくら負けても平氣でゐる汝の厚顏は見たくもない、「早く準備して勝負を決せよ。」といひました。さすがに「七たび擒になつて七たび縱たれた話は昔から聞いたこともない。とてもかなはない。全く丞相は天威である。御恩は決して忘れません。」と一族をひきつれて降參しましたので、孔明は獲を南蠻王として占領した土地を

かへしてやりました。

そしてかへる時此所に誰か役人をおとめになつたがいいといふ人もありましたが、それには入費の多く入ることと南蠻人を疑はせることが深くてだめだとしりぞけて、孔明はそのまゝ兵隊をつれて凱旋しました。

◉前出師の表……讀んで泣かざる者は忠臣にあらず

建興四年五月魏の曹丕病死して子の叡が位をつぎました。司馬懿（仲達）は魏のために雍涼を守ることを願出ました。孔明はこれ

を聞いて大變心配して早速攻めようとしました。が馬謖は孔明の南蠻征伐で人馬が疲れてゐるから戰爭するよりも反間の計をする方が上策だといひました。そこで孔明は人をやつて千金を散じて仲達が叛くことを流言させました。所が案の如く曹叡は仲達を疑つて群臣を集めて相談しました。すると華歆といふ家來が「彼が自分から雍涼を守りたいといふのは謀叛するためでせう。武帝（曹操）はいつもおつしやいました。司馬仲達は鷹視狼顧してゐるから若し之に兵權をまかせると必ず亂をなすと。果してその通り叛くにちがいありません。直樣之をお伐ちになつたがよろしうご

ざいます。」といふと、又、王郎が「懿は深く兵學を知つてゐますが今やつつけませんと後で大變なことになりませう。」と贊成しました。しかし曹眞が諫めて文帝(丕)が私を仲達におたのみ下さいましたのは彼が二心ないからでございます。今事實もおしらべにならないでお征伐になつては或は吳や蜀の計にかかるかも知れません。どうか陛下御自身でお檢べ下さい。」といひましたから叡もその氣になつて仲達の兵權を奪つて故鄕にかへらせました。孔明は大に喜んで仲達さへゐなければ大丈夫だといふので翌年三月全國の兵を集めて魏を攻めることにかかりました。

孔明は出征前に李嚴に白帝城を守らせて吳に備へ郭攸之、董允、費禕を侍中として宮中の事を司らせ、向寵に御林の兵を統べさせ蔣琬、張裔に丞相の代りをさせることにしました。適材を適所におく用意周到は驚くばかりであります。

孔明は出るとき出師の表を王樣にたてまつりました。その文に「先帝創業未だ半ならずして中道にして崩殂せり、今天下三分益州疲敝す、此れ誠に危急存亡の秋なり。しかれども侍衞の臣、內におこたらず、忠死の士、身を外に忘るゝものは蓋し先帝の殊遇を追ひ之を陛下に報ぜんと欲すればなり、誠に宜しく聖聽

を開張〜て以て先帝の遺德を廣め志士の氣を恢弘すべし、宜しくみだりに自ら韮薄にして喩を引き義を失ひ以て忠諫の路を塞ぐべからざるなり、宮中府中ともに一體となり臧否を陟罰する事宜しく異同あるべからず、若し奸をなし科を犯し及び忠善をなすものあらば宜しく有司に付して其の刑賞を論じ、以て陛下平明の治をあきらかにすべし、宜しく偏私して内外法を異にせしむべからず、侍中侍郎郭攸之、費禕、董允等これ皆良實にして志慮忠純なり、是を以て先帝簡拔して以て陛下に遺す、愚おもへらく宮中の事、事大小となく悉く以て之にとうて然る後

施行せば必ず能く闕漏を裨補し廣益する所あらん、將軍向寵は性行淑均にして軍事に曉暢せり、昔日に試用せられ先帝之を稱して能といへり、これを以て衆議寵を擧げて督となす、愚おもへらく營中の事、事大小となく悉く之にとはば必ずよく行陣をして和睦して優劣所を得せしめん、賢臣を親しみ小人を遠ざくるはこれ前漢の興隆する所以なり、小人を親しみ賢人を遠ざくるはこれ後漢の傾頽する所以なり、先帝おはすの時つねに臣とこの事を論じ未だかつて桓靈に痛恨嘆息せずんはあらざるなり。侍中尚書(陳震)長史參軍(蔣琬)それ悉く貞亮節に死する

の臣なり陛下之に親しみ之を信ぜば則はち漢室の隆ならん事日を記して待つべきなり。臣もと布衣、みづから南陽に耕し、苟も性命を亂世に全うせんとして聞達を諸侯に求めず、先帝の鄙しきをもつてせず猥りに自ら枉屈して三たび臣を草廬の中に顧み臣にとふに當世の事をもつてす、これによつて感激して先帝に許すに駘馳をもつてせり、後傾覆にあひ任を敗軍の際にうけ命を危難の間に奉じ再來廿有一年なり、先帝臣が謹慎なるを知れり、故に崩ずるに蒞み囿に寄するに大任をもつてせるなり命を受けて以來夙夜憂慮し付託効あらずしてもつて先帝の明を

傷けん事を恐る、故に五月瀘を渡り深く不毛に入る、今南方已に定まり甲兵既に足る、まさに三軍を奬率して北中原を定むべしこひねがはくば駑鈍をつくして奸凶を攘除しもつて漢室を復興して舊都にかへらん事これ臣が先帝に報じしかして陛下に忠なる所以の職分なり、損益を斟酌し忠言を進め盡すに至つてはすなはち攸之、費、允の任なり、願くは陛下臣に託するに討賊興復の效をもつてせよ、効あらずんばすなはち臣が罪を治めてもつて先帝の靈に告げよ、廣益の言なくば攸之、禕允の咎を責めてもつて其慢をあらはせ陛下も亦宜しく自ら謀つてもつて善

道を諮諏し雅言を察納し深く先帝の遺詔を追ふべし、臣恩を受けて感激にたえず、今まさに遠く離れんとするに當り表に臨んで涕泣いふ所を知らず、謹んで表す。

昔から出師の表を讀んで泣かないのは忠臣でないといはれてゐる位に、孔明の一生を知つてこの文を讀みますと、忠誠の心にひきつけられないではゐられません。よく孔明の精神とはたらきを知らないで讀みますと、自分で謹慎など書いた所がうぬぼれのやうに見えますが、よく孔明の人となりを知れば決してそんなものでない事がわかります。

◉涙をふるつて馬謖をきる……英雄の心中

孔明は三十万の兵をもつて趙雲、鄧芝を先鋒として漢中から進んで魏を攻めようとしました。叡は驚いて家來に長安を守らせました。魏延といふものが「精兵が五千人あつたら私は十日の中に長安に攻め入りますから丞相が正面からお出になれば、何わけはありません。」と申出ましたが、孔明は安全第一でないといふので賛成しませんでした。延は後まで殘念がつて孔明の卑怯をせめまし

た。先鋒趙雲は魏兵を破つて南安郡の城に入りました。孔明が使者を魏兵の如くよそはせて安定郡に救を求めさせました。城主が出た所を攻めましたのですぐ占領してしまひました。この時天水郡の太守も救はうとしましたが姜維が孔明の計を見破つて裏をかいたので蜀の兵が負けてしまひました。孔明は計をもつて姜維を降參させてから、これを敬つて「私は草廬を出てから、まだ君のやうな人を見た事がない。私の研究した所を傳へるのは君より外にない。」と喜びました。そこで姜維の計で天水、南安を占領して威勢が強くなりました。

孔明は祁山に出て渭水の西に陣取りました。叡は驚いて大將軍曹眞に防がせましたが、眞は遂にまけてしまひましたので叡は長安に行つて司馬仲達を平西都督として協同して蜀軍に當りました。この時魏に降參してゐた孟達が李嚴に手紙をやつて内應しようといつて來ました。孔明は喜びましたが、司馬仲達が都督となつたと聞いて失望しました。とても達は仲達の敵でありませんから、孔明は蜀のすゝめによつて達に手紙をやつて仲達に用心するやうに注意しました。達は笑つて孔明は何ぜこんなに疑ひ深いのだらう、仲達が知つても魏王に伺つから來るのには一ケ月かゝる、し

かも自分は要害の地に居るから大丈夫だとの返事をやりました。
孔明は手紙を捨てゝ達はきつと仲達に殺されるといひました。諸
が怪んで尋ねますと、仲達は既に都督に命ぜられたので一々王に
きかないから十日の中に達を攻めるにきまつてゐる。それを一ケ
月かゝるなどと思つてゐてはだめだといひました。果して仲達は
達の叛をきくと直ぐかけつけました。道で孔明の「早く用意しな
ければだめだ。」といふ手紙を持つた使者を捕へてさすがは孔明だ
と感心しました。道を急いだ兵隊は道々で集めて進んで八日で達
をかこみました。まだ準備が出來てゐなかつたので十六日目には

達は殺されてしまひました。仲達はそれから長安に出て叡に會ひ
ました。
孟達が死んだので司馬仲達を防がねばならなくなりました孔明
は「仲達は必ず街亭を取るに違ひない、街亭は我軍の咽喉である、
もし此所を取られたらこの大軍も一日も居られなくなる。誰か此
所を守れる自信がありますか。」といひました。
諸「願くは私が守りませう。」
孔明「街亭は大軍の生死にかゝはる所の大事の場所であるが城池な
く險阻なく守り難い土地であるのに敵は司馬仲達といふ名將であ

り先鋒張郃も亦万夫不當の勇將である、汝にはとても守れまい。」

謖むつとして「子供の時から兵法を研究してゐるのに僅か一街亭が守れぬ事はあるまい、願くは一身を賭けて守つて見ませう。」

孔明「しからば精兵二万五千と參謀王平をやるから十分氣をつけてくれ、もし此所が守れたらば長安を占領する第一の手柄だ。」と戒めて自分は郿城を攻めることにしました。

馬謖は街亭に行つて地勢をを見て笑つて「此の山路は魏兵にも來られまい。」といひました。王平は「しかし五路の總口に陣をとつて持久の計をしなければなりますまい。」謖「此所は山が連ならないで樹木繁茂してゐるから山の頂上に陣をしよう。」平「いや五路の總口でなければ山上にゐて敵に四方をかこまれて水道をたたれてはだめです。」謖「ハハ……高い所から下を見て破竹の勢でやつつけたらよい。」平「いや丞相に從つて私は陣取り方を何時もきいてゐるがここはだめです。」

謖は何といつても山上に陣しました。平は仕方がないから山の下に小塞を作つて別に守りました。仲達は備を見て驚きましたが謖が大將だと聞いて安心して「孔明は計を知つてゐるが人の使ひ方を知らない。」といつて張郃に圍ませて水道をたつたので蜀の

兵はおりて來ません。部が火攻にしたので謖は命からゞ〳〵逃げました。

孔明「アゝもうだめだ、何もかも失敗してしまつた。自分の過ちである。」といつて三軍に退陣を命じました。仲達は大軍で突擊しました。孔明は僅に二千の小兵で手の出しようがないので四方の門を開け放して兵士には人の居ないやうに靜かにしてゐるやうに命じて自分は樓門に上つて琴をひいてゐました。仲達はそばまで攻めて來ましたが近寄りません。孔明はやつと虎口をのがれで退却することが出來ました。

部下の大將が仲達は十五万の大軍をもつてゐて何ぜせめなかつたでせうと尋ねました時、孔明は笑つて「彼は平生私が謹慎なことを知つてゐる、既に街亭にさへ備をした位だから必ず此所にも備へがあるはずだと思つてゐた。だから伏兵がゐることを心配して退いたのです、冒險はよくないが誠にあの外には仕方がないのであやつたが、もしあの時僅か二千の兵で城をすてて逃げたら彼は勝に乘じて進んで我々は捕虜にされたにちがひない。」と敎へました。

孔明は大敗して漢中に退いて趙雲の退軍を迎へました。雲は地

上に拜して「敗軍の將を能々丞相のお出迎へは恐れ入ります。」といひましたので孔明は「私が賢愚の見分けを誤つたためだ。」と恥ぢて、「皆大損害をうけたのに君の軍だけうまく歸れたのはどういふわけです。」と尋ねました。鄧芝が「趙將軍唯一騎其後をたち敵將をおきりになりましたからです。」と答へましたので孔明は大いにほめて軍資金をやりましたが雲は「三軍に尺寸の功なく私もその罪は同じでございます、ひとり恩賞を受けるにしのびません。」といひました。孔明はこれが眞の大將だとほめました。

孔明が王平をしらべて見ますと馬謖の誤りがわかりましたので怒つて謖を呼んで「あれだけいつてきかせたのに王平の言葉を用ひないからあんなに負けてしまつたのだ。戰爭はまけ將士は戰死し城はとられ土地を失つたのは皆汝一人の罪だ。自分から進んでこの重大な責任をうけて軍法を犯したから罪はのがれない、汝の死後は家の事はやつてあげるが、汝の命は貰はねばならぬ。」

謖「丞相が私を子のやうに愛して下さつたから、私も父と思つて事へて來ました。私の死後までお考へ下さるのに何で恨みませう。」と泣きました。

孔明「汝は弟と思つてゐたから妻子の事はよくしてあげる。軍法は

致し方ない。覺悟をしろ。」と役人に命じて斬らせました。三軍の人は皆泣いて之を惜しみました。蔣琬は成都からこの時かへつて來ましたが、孔明を諫めて國家多事の際に智謀の人を失ふはよろしくないといつて思止まらせようとしましたが「法はまげられぬ。」といつて何といつても致方ないとききませんでした。それでも孔明は謖の首を見て今更の如く泣きますから琬は「私がとめる時はおききにならないで、なぜ又お泣きになります。」と尋ねました。孔明は「親子のやうな間柄であるけれど軍法によつて殺されたからそれは致し方がないが唯殘念なのは先帝が私に『馬謖は言

葉が上手すぎる、必ず重く用ひてはいけない。』とおつしやつた事を守らなかつたのが恥かしい。」といひました。一座の人は皆袖をしぼりました。

孔明は謖を厚く葬つて妻子を愛撫してやつて王樣にお願ひして自分も罰として職三等をさげていただきました。

それ程大事な時、謖を大將にしたのがよくないといふことになりますが、前にも述べましたやうに謖も參謀としてはなか〳〵よい思ひつきがありました。ただ大將としの謖がよくなかつたので孔明程の人物を見る事のうまい人としては惜しい誤りでした。

◉後の出師の表……王者を激勵す

建興六年六月司馬仲達は街亭の戰に勝つてから一將に此所を守らせて都にかへつて九月に石亭で吳と戰爭をして大に破られました。

孔明は一番大事な街亭でまけたのが殘念であるから今吳と魏と戰つてゐる中に魏を征伐しようと思ひましたが、皆は前の負け軍にこりて元氣がありません。そこで又出師の表を王樣にたてまつりました。その文に

先帝深く漢(蜀)と賊(魏)と兩立せず、王業偏安ならざるを慮り臣に託するに賊を討つを以つてせり、先帝の明を以て臣の才を料る、臣が賊を討つに才弱く敵の强きを知れり、然れども賊を伐たずんば王業も亦亡びん、おもふに坐して亡ぶを待たんは之を伐つといづれぞや、是故に臣に託して疑はざるなり、臣、命を受くるの日、寢て席を安んせず、食べて味を甘しとせず、北征を思うて宜しく先づ南に入るべしとなす、故に五月瀘を渡り深く不毛に入り、日を幷せて食ふ、臣自ら惜まざるにあらず、顧ふに王業蜀都に偏安なるべからず、故に危難を冒して以て先

帝の遺意を奉ず、しかるに議者いへらく計にあらずと、今賊たま〳〵西に疲る、又東に馳す、兵法は勞に乘ず是れ進趨の時なり、謹んで其事を述ぶる左の如し、

として　一、蜀の強さが坐して天下を定める程になつてゐないこと

二、にえきらぬ間に孫策が江東を占領すること、三、吳に對して、

四、先帝が能といつてゐられた曹操でさへも隨分苦戰をした、五、

今迄にも良將勇士が澤山死んだ、この調子で行けば人物がなくなつて戰爭が出來なくなる、六、民窮し兵疲れたといふがそれは、やめてもやめなくても勞費は等しい、七、物事は努力してゐても成功しにくい。安心してゐたら一層だめに違ひない。と數へて主戰論を唱へて「死してしかして後已まむ、成敗利鈍に至つては臣の明能く逆めみる所にあらざるなり、謹んで表して以て聞し聖斷を仰ぐ建興六年冬十一月」と結んでゐます。

◉祁山の用兵……彼は天下の奇才なり

孔明は三十万の兵で二度目の討魏を始めました。陳倉道で仲達がのこした兵のために蜀軍は苦められてゐるのに曹眞の援軍が來ました。孔明は斜谷から再び祁山に陣して眞を破りましたが陳倉

道が塞がれてゐますから兵糧がたりません。叡は眞に出て戰つてはならぬと命じましたので孔明は一戰して勝つたまゝそつと退陣しました。この事を眞は幾日もしてから知つたので口惜がりましたが追付きません。陳倉道の蜀軍も退陣しましたので王雙が追擊して來て孔明の計にかゝつて討死しまゝた。

吳王孫權は皇帝の位につきました。孔明はお祝ひの使者をやつて同盟して魏を攻めやうと申出ました。魏帝では心配しまゝたが仲達が權は安心してゐるが勸められてやるだけの事で心配はない孔明は一生懸命ですからこれに全力をそゝがねばなりませんといひました。

魏の大將が病氣した時孔明が攻めたので、さすがの陳倉も陷りました。そこで三たび祁山に陣して近所を占領しました。仲達は救ひに來て孔明に打破られました。この手柄によつて王樣は孔明を再び丞相の職にしました。が孔明は病氣になつたので成都にかへりました。

曹眞は仲達と共に蜀を伐つもりで來ましたが陳倉で困りぬいて糧食薪炭がないので退きました。仲達には考へがある筈だと孔明は決して追擊しません。後で祁山に出て魏を攻めよと命じまし

たので諸將は「長安を攻める道はいくらもあるのに何時でも祁山ばかりおとりになりますが。」と尋ねました。孔明は「祁山は長安の首である。」といつて地理的に軍事上の話をしてきかせました。

四たび祁山を占領しました時、眞は陣中に病死し、仲達は大敗して出て來ません。仲達は蜀から降つてゐる苟安を使つて孔明は謀叛をすると流言をさせました。王様がお父様（劉備）のやうにえらくないから心配して孔明を呼びかへしました。孔明は殘念でたまらないが君命は致方ないとかへりました。毎日竈を增してゐて靜かに退陣しましたから追擊しようと用意して待つてゐた仲達も蜀軍の兵隊が多くなると思つてゐる中に敵は居なくなつたので「彼の智謀は我の及ぶ所でない。」と感心して自分も洛陽にかへりました。

孔明は成都にかへつてみますと王様は何も用はないので怒つて悪いおそば役人を誅してから十万の兵を漢中に豫備としておいて十万をつれて魏を攻めました。兵糧の運送は李嚴に命じて建興九年の春五たび祁山に出ました。孔明は麥を刈つて兵糧にしてゐましたので、仲達はその邪魔をしに來て散々にやられました。そこで今度は蜀軍が兵糧の道を襲うてしかへしをしようとしました。

所が三ケ月交替の時になつたので蜀軍はかへさねばならぬことになりました。楊儀は「漢中の兵と三ケ月で交替させるのは私が申出ましたが一刻を爭ふ場合だから仲達の軍を破るまでとめておいては如何なものでせう。」といひますと孔明は「きまりはきまりだからどんな事があつてもとめてはならぬ。」と反對しました。皆は孔明の義理堅いのに感心して暫くとめてもらひたいと願ひ出ました。孔明は大に喜んで仲達を逆襲して大いに敗りました。

所が李嚴はいくら骨折つても思ふ通り兵糧の運送が出來ぬので罰せられる事を恐れて「敵が永安城を攻める」と流言させました。

孔明はびつくりして退軍しますと、張郃は追擊しようとしますと、仲達が又孔明の計だろうといつてとめたが郃はきかないで追うて來ました。仲達は氣をつけましたが案の如く郃は射殺されてしまひました。孔明は漢中に入つてみると費禕が勅使として來ました。「嚴の方から澤山の兵糧を送つたのに孔明はかへるから謀叛するだらとの事だがどうか。」との事で驚いてしらべてみると、嚴が自分の罪をのがれるために國家に大損害をやらせたとわかりましたので斬らうとしましたが勅使は「命だけは助けて下さい、彼も先帝の寵臣だから。」といひましたのでその子の李豐を兵糧の役人

にして嚴は流罪にしました。

これから三年間孔明は戰爭をやめて軍馬の調練と政治に努めました。國中皆孔明の恩德を慕ひました。

◉秋風五丈原……俊傑は俊傑を知る

建興十二年の春又魏を攻める事を孔明が願出ましたので王樣は三國は鼎立して吳や魏からは一度も攻めて來ないのに丞相は何ぜ太平を樂しまないのかとおつしやいました。孔明は「軍士の養成に三年つくし糧食も軍器も十分であつて人馬勇壯だから此際先帝の

知遇の萬一に報じたいと存じます。中原をとつて昔の漢の帝室通りにしなければ決して陛下に二度とお目にかゝりません。」といつて他の人のとめるのもきかないで先帝の廟にお別れ參りして「五たび祁山に出て一寸の土地も得ない罪は決して輕くありません。今又大軍をもつて更に祁山に出る以上は死力をつくして賊を亡ぼし中原をとりもどさなくては再びかへりません。」と申してお祭をしました。王樣は百官をつれて遠く城外までお見送りになりました。

孔明は三十餘萬を五路に分けて祁山に陣しました。魏は仲達が

防禦に來ました。孔明は吳に使者をやつて同盟して魏を攻めさして自分は屯田其他持久の計をし、今迄兵糧に困りましたから木牛流馬を作つて輸送の助けにしました。仲達は心配して手の下し樣を知らないで諸將が戰爭しようといふので困りました。待つて居ても仲達の方から攻めませんので孔明は兵糧を集めるやうに見せかけて胡蘆谷に薪炭を運びました。仲達は、この兵糧さへ燒けば蜀軍は亂れるたらうと思つて精兵をつれて燒討に來ましたが却つて火攻めになつて出口を塞がれて死物狂になりましたが逃げ出る道がないので二子を抱いて長嘆して死を覺悟しました。が俄雨の

ためにやつとの事で命から〳〵逃げました。孔明は「あゝ事を謀るは人にあり、事のなるは天にあり。」といつて失望しました。仲達は益々孔明が恐ろしくなつて愈出て攻めない事にしました。

蜀軍は五丈原に陣取ました。前から仲達は孔明が必ず五丈原に陣取るだらうと思つてゐたのでいつはつて「敵が五丈原に陣をとるならば少しも恐るゝことはないが……。」と諸將に度々いつて安心させて居ました。五丈原はそれ程地形がいゝのだが仲達は「いよいよ大魏皇帝の幸福となつた。我軍は堅く守つてさへゐれば今に蜀軍の中に變事があるにきまつてゐる。」といつて百日も出て來ま

せん。蜀軍から再三戰爭をしかけてもだめですから孔明は女の着物を進物にして「昔管子が禮儀廉恥は國の寶である。これがなければだめだといつたが、仲達は男らしくもなく士の中にかくれて刀箭を避けるとは女のやうちやないか。もし戰爭が出來ないのなら女に相違ないから之を貰つたらいゝだらう。が男ならいさぎよく一勝負しようではないか。」といふ意味の手紙をつけてやりました。

仲達は怒つたが怒れば孔明の計にかゝるから無理に笑つて喜んで頂戴して使者に兵事の事は一つも聞かないで孔明の日常生活を

きゝました。使者は孔明が朝早くから夜晩くまで働いて毎日二十以上の裁判をしたり其他忙しいこと、あまり澤山食べないことを話しますと仲達は左右の人に「食物が少しでそんなにいそがしいなら體がつゞくまい。」といひました。使者がかへつてその話をしますと孔明は仲達に感心しました。そばにゐた人々も「他人にまかせられることはなるだけ、まかせて下さい、丞相のお體が一番大事だから。」と申しました。孔明は「それは自分もわかつてゐるが先帝の重恩を思ふとつい無理とは知りながらやるから。」といつて感じ深く見えました。

遂に孔明は夏の盛りになつて病氣になつてしまひました。

魏の方では仲達がバカにされて女の着物を貰つても戰はないので卑怯だと罵りました。

仲達は笑つて天子様の命令だから攻めないまでで諸君がそんなにいふならば表をたてまつつてお願ひしようと魏帝に戰爭を願出ました。帝も今更そんな願が來たんで怪まれて群臣にお尋ねになりますと心きいた家來が進み出て「仲達は今戰つていけないと思ふけれど諸將がきかないでせう、どうか戰つていけないとお命じになる方がよろしい。」と申上げました。そこで仲達は諸將に申渡

しました。「この通り陛下から戰つていけないと命ぜられてゐるのに戰ふといふ人は重く罰するから。」と。

孔明はこの話を聞いて笑つて仲達はなか〳〵味をやるわいといひました。先に孟達を討つた時はまだ王様にお目にかゝる前であつたのに今遠い所を態々手紙を往復させる所に仲達の計略があるので孔明程の人にはよくそれがわかるものです。

吳の孫權は孔明の手紙を見てから魏を攻めましたが大いに敗れてしまひました。孔明の病氣はこの事を聞いて一層重くなりまし

た。

仲達は孔明が病んだと聞いて一軍に命じて蜀の陣を攻めて見ました。孔明は魏延に猛烈な逆襲をやらせましたので仲達は病氣といつても噂程でない極輕いのだと思ひました。

孔明は姜維を召して自分の研究を授けて細々と後事をたのみました。楊儀を招いて「魏延は長くたゝぬ中に謀叛をしさうだからもし叛いたらこの嚢を開けなさい。」といつて錦の嚢を授けました。

王様も孔明が病氣だときいて李福を晝夜兼行で見舞はせられました。孔明は李福に向つて戰爭の中途で死ぬ事の罪の重い事を謝

し天子に遺言をたのみました。それは官制を勝手にかへたり孔明が任用した人をみだりにやめさせてはならぬ、姜維は智勇の大將だから重く用ひることなどでした。

孔明は小さい車にのつて陣營を巡檢しました。左右にたすけられて冷氣骨に徹るやうな秋風にやつれた面を吹かれて廻りました涙を流して諸將に「再び陣に臨んで諸君と共に賊を伐つ事は出來ぬ、悠々たる青空ははてしのないものだ……」と長い〳〵太息をついて後陣にかへりました。

▣將星おつ……死せる孔明、生ける仲達を走らす

病みおとろへた體を秋風に吹かれて巡視してから孔明の病氣は急に重くなりました。楊儀を枕近く呼びまして「王平、廖化、張翼張巍、吳懿は皆忠義の士だから重く用ひてくれ。私が死んだらよく諸將にいつてきかせて平常通りに靜かに兵を退かねばならぬ。もし急に退くと仲達が必ず追擊するだらう。姜維は智勇の大將だから後陣の備にせよ、私が死んでも固く喪をかくして仲達が若し攻めて來たら私の木像を車にのせて推しだして大小の將士を左右に排列せよ、仲達は逃げるにきまつてゐる。」といふより早く仆れてしまひました。その時李福が又ひきかへして來て孔明の死んだのを見てひどく泣いて「我れ國家を謬れり。」と太息をしてゐますと孔明は再び眼をあいて李福が前に立つてゐるのを見ました。「李福は丞相の後繼者をたづねに來たのだらう。蔣琬がよい。」福「その後は誰がいゝでせう。」孔明「費禕がよい。」李福が又その次をいくら尋ねても答へないので近づいてみますと既に薨じてゐました。——

建興十三年八月二十三日　五十四才。

姜維楊儀はこれを發表しないでもとのまゝにして魏延を後陣と

してその次に姜維が備へて一營づゝ静かに退陣を命じました。

魏延は果して楊儀の命令をききませんから姜維がその後を絶つて緩々と退陣しました。仲達が之を知つて先づ五丈原を攻めましたが蜀軍の陣は唯旗だけが立つて人の子一人もゐません。仲達は大喜びで孔明は本當に死んだのだと急に追擊して自ら先頭に立つて勇しく追立てました。姜維はすぐとつてかへして逆襲しました眞先に大漢丞相諸葛武侯と書いた旗を立てて中軍に例の四輪車を推だして數十の大將が之を守つて孔明は綸巾を戴いて鶴氅を被つて手に羽扇を持つて端坐してゐます。姜維は馬を躍らせて大聲に叱咤して打つてかゝりましたので仲達はびつくりして「又孔明の計に陷つた。」と急に引返して散々に逃げました。蜀軍は静々と引いて谷中に入つてから初めて喪を發しますと、三軍の哀痛する聲は地を動かすばかりでした。これから誰いふとなく「死んだ孔明は生きた仲達を追拂つた。」といつて仲達を嘲りました。仲達は後で木偶だつたと聞いて「生きた者との戰爭は出來るが、死人との戰爭は出來ない。」といひました。諸將をつれて孔明の陣營の跡を見て「まことに天下の奇才だ。」とほめたたへて自分もかへりました。諸將もポツと息をついて「孔明が死んだので枕を高くして

寢られる。」といひ合ひました。

魏延は棧道を燒いて楊儀等の退陣をさへぎりました。楊儀は錦囊の中の謀を見て延を斬らせて孔明の靈柩を奉じて成都にかへりました。

王様は孔明の遺言を見て今更の如くに悲まれました。それは臣としてよりも親としての誠心から出たものでした。遺言によつて墓は定軍山に極質素に營まれました。お祭もしないことに遺言してあつたので王様は十月に孔明の考へ通りに墓をお作らせになりました。

國中の人々皆泣き悲しみました。李嚴を初め孔明から重く罰せられた人達でも國家のために之を惜しみました。

孔明の一人子の思遠は後でその子尙と共に國家のために討死します。

孔明終

私の敬慕する中村春二先生が逝かれてから秋風五丈原を讀むと感慨無量である。

そのことは別に他日詳しく發表する機會がありませう。

私はこの小さい事業が順風に帆をあげたことをよろこびます。

そして少からず色々と御同情下さる方に厚く御禮を申します。

—著　者—

附　錄

赤壁の戰

赤壁の戰は三國史の中でも最大の激戰であり、又最も興趣の深い戰爭であつた。建安十三年に吳の孫權が柴桑で孔明と會見して劉備と聯合して曹操を擊つた事は既に本文にのべた通りである。

荆州に追つた曹操は孫權に手紙をやつて言ふやう

「曹、近頃帝命を受け、詞を奉じて罪人を征伐し、一度旗を南に指させば劉琮手を束ねて降り、荆襄二州の民は風をのぞんで歸順した。今大兵百萬上將千人を統べてゐ

るから共に將軍と江夏に獵し聯合して劉備を伐つて同じ漢土を分けて永く同盟を結びたい。早く返事を待つ。」

と威壓して來た。權はこれを群臣に見せて意見を求めた所が、張昭は

「曹操が今百萬の大軍を以て水陸二方から攻めて來ては火山のやうな勢である。しかも我のたのみとするのは唯僅に江の險があるばかりである。君何を以てお戰ひになりますか、これは操に降つて國家萬全の計をするより外ありますまい。孔明が計にかゝつてウッカリ兵を起すなどは本當に薪を脊負つて火を消すやうなものです。」

といつた。權は一旦戰爭ときめたが昭に言はれて見ると又心が迷つて後室に入つてしばらく呻吟してゐた。彼の母はその有樣を見て心配されたから權は

「今曹操は兵を江漢に集めて吳を攻めるつもりでゐます。そこで諸大將の意見を求めましたが降參しようとか戰はうとか意見がまち〳〵でできません。若し戰ふとすれば餘りに味方が少いし、それではといつて降參すれば曹操から侮られるだらうし私は全く困りました。」

と言つたので母は長嘆息して

「汝の兄孫策の遺言に、國內の事で迷つたら張昭に聞け、外交問題で惑つたら周瑜に問へとあつたではないの、そんな外交に關したことを張昭などの考よりも、何せ周瑜に相談なさらない？」

と注意されました。そこで權は早速使者を鄱陽湖にやつて周瑜をよんだ。

周瑜は鄱陽湖に舟手の勢を調練してゐたが、急いでかへつて來ると、孫權は

「曹操が今大軍をひきつれて攻めて來さうなので、諸將に相談しても主戰論と降伏論

で實はわしも迷つてゐる。卿は一體どちらに贊成するのか？」

といはれた。周瑜はもとから大の主戰論者であるから

「曹操が殊更に漢室の命だといつた所で實は漢の賊でございます。君は神武雄才かねそなへはり父兄の大業をおつぎになつて東吳六郡の地をもつて、精兵と澤山の糧食があり、天下の英雄は雲の如く集つて忠義をつくさうと思つてゐますから、よろしく天下に横行して人民の害をのぞき、逆賊を平げられなくてはなりません。ましていまは曹操が自分から來てその首を渡さうとするのに、こちらが降參するなどは以ての外ではありませんか。私が思ひますのに北國はまだ平定してゐません。馬超、漢遂など虛に乘じて曹操の後をつかうとしてゐます。又曹操の兵はいくら多くても水軍になれません。それだのに馬を捨てゝ舟にのつて、吳越と戰ふなんて無謀な事をしようとしてゐます。その上今は寒さがきびしくつて馬の秣もありません。しかも中國の兵をひきつれて遠く江湖を渡つて來ますから水や風土になれませんために病人も多いでせう。この四つは用兵上の重要な問題でありますが曹操の向見ずは四つとも無理をしてゐます。これは彼を捕虜にするのに絶好の機會であります。私に數萬の兵をおかし下さらば進んで夏口に出て彼を粉みぢんにしてお目にかけます。」

と述べた。權は大に喜んで

「曹操は常に漢の天下を奪はうとしてゐる。そのために袁紹、呂布、劉表などと吾をおそれてゐた。が今は大半滅されて完全に殘つたのは自分だけだ。自分は誓つて彼と雌雄を決して見よう。汝の意見は大によろしい。」

といつて群臣の所に出て劒を拔いて机にきりつけて

「汝等二度と曹操に降參しようといつたら此の通りきりすてるぞ。」と叱つてから、その劍を周瑜に授けて、その場で大都督に命じて程普を副都督とし魯肅を贊軍校尉に任じた。

いよ〳〵吳は戰爭することにきまつた。劉備と聯合して一擧に魏軍を破らうと決した。周瑜は精兵三萬をひきつれて柴桑に出て韓當、黃蓋を先鋒として水陸共に兵を進めて、江を西の夏口に向つて遡つて三江をさること五六十里餘、江南に水寨を備へて、陸は西山に陣をしいた。

話かはつて曹操は百萬の兵をひきつれて江陵から流について東下して三江のあたりの赤壁の險に據つて氷寨を構へて堅陣を張つて江北を人馬でうづめた。建安十三年十一月一日、曹操は周瑜に手紙をやつたが表に『漢大丞相周都督』と書いてあつたので瑜はそのまゝ怒つてその使者を斬つてしまつた。操もまた怒つて水軍の大都督蔡瑁の弟蔡瑁を先鋒として船を出して三江に吳軍を攻めさせた。瑜はそこで甘寧を先鋒とし、韓當を左軍、蔣欽を右軍としてこれを防がせた。甘寧は弓でもつて、たつた一矢で蔡瑁を水中に射落して、自から船を走らせて操の後陣に斬り入つた。左右兩軍がこれをたすけたので魏軍は大敗した。

操はこの日北兵の舟軍になれない者が多く討死したのをなげいて、水軍の大都督蔡瑁、張允をして水中に寨柵を作らせて三十四座の水門と大船とでもつて外郭として夜を日についで北兵に水軍の調練をやらせた。瑜は或夜舟を用意してひそかに操の水寨の近くに行つて見て水軍の有樣を見て大に驚いて、これでは蔡瑁、張允等をやつつ

けねば操は破れないと思つた。そこで計をもつて蔡瑁、張允等が呉軍に通じてゐると操に知らせた。操は怒つて兩將を斬殺した。瑜は計のなつたのを喜ぶと同時に案外曹操は馬鹿だと思つた。

又曹操が呉軍に間者を送つてひそかに敵の計を通せさせ様と思つて、蔡瑁の弟の蔡和、蔡仲の兩人を詐つて呉に降參させた。瑜は大變喜んで

「卿等は兄の蔡瑁が罪もないのに操のために殺されたので、今來られても私はちつとも疑はない。どうか呉のために操を破る計をしてくれ。」

といつて金帛を與へて上將として甘寧の陣に置いた。そしてそつと甘寧を呼んで、

「この兩人は操の計で詐つて降參して來たが、こちらにも亦一つの計があるから

油斷してはいけない。」

とさとした。黄蓋は周瑜に向つて

「敵は多勢で味方は少いから火攻でなければ勝てますまい。」

といつた。瑜も亦火攻の計を考へてゐたが殘念な事には詐つて操に降るものがないと思つてゐたのでその事を蓋に話すと

「それでは私がいたしませう。」

といつた。しかし大ていの苦み方では操はだませないからと瑜は念をおしたが、蓋は

「何に、一命をなげうつても何でもありません。」

と請合つたので二人はひそかに計をめぐらした。それから鼓を鳴らして諸將を集めて瑜は

「曹操は百萬の軍勢で三百里にわたつて陣してゐるから一度に破らうとしたら却つて負けてしまふだらう。とゝは持久の策を講じなければならない。そこで諸將は先づ三月分の兵糧を積込んで合戰の用意をしなくてはいけない。」

と命した。その時黄蓋が進んで

「それは都督が三月分といはれたが、たとひ三十ヶ月分の兵糧があつても、曹操はとても破れますまい。どうせ負けるにきまつてゐるものを何とかするよりも、思ひきつて甲をぬいで鋒を倒にして曹操に降參した方がましでせう。」

といひもをはらぬに瑜は眞赤になつて怒つて

「われは君命をうけて既に計もきまつてゐる。それだのに降伏をいひだすものがあつたら斬捨てると約束した。だれか早くその蓋の首をきつちまへ。」

とどなつた。諸將がしきりに瑜を諫めて蓋の命乞ひをした。プン〳〵怒つて瑜は監獄の役人を呼んで

「笞刑五十杖。」

と申付けた。笞で五十だけ打つてしまふと又「五十杖」と叫んだ。蓋の皮膚は破れて血が流れた。

黄蓋は皆に助けられてやつと自分の陣にかへつた。參謀の闞澤が來て

「將軍今日責をうけられたのは苦肉の計でせう。」といつたので蓋は

「さうだ。自分は吳に事へてもはや三代の厚恩をうけてゐる。だからこんな計をもつて曹操を破つて御恩の萬分の一に報したい考へだ。卿は自分のために使者となつて操に降參狀をあげてくれ。」

とたのんだ。澤は漁士のいでたちをして夜にまぎれて操の陣に行つて

「黄蓋は周瑜に辱をかゝせられて謀叛したくなりました。お手紙を書いて丞相に降參を申入れます。幸にお聞入れ下さいましたら黄蓋は吳軍の兵糧や武具を支配してゐますから、必ずこれを盜んで馳せ參じます。」

といて手紙を操に差上げた。が話が餘りに自分に都合がよいので操は容易に信じようとしない。所が蔡和、蔡仲からも蓋が大へん恥かしめられたと知らせて來ましたのでやつと闞澤の言葉を信用して

「卿が再び吳に歸つたら黄蓋と相談をして愈〻降參して來る日を知らせてくれ。そしたら兵を出迎に出すから。」

と操は喜んでいつに。澤はかへつてから詐つて蔡和や蔡仲と結んで自分や蓋が謀反することを操に知らせさせた。その上手紙を書かせて

「黄蓋が兵糧を盜んで馳參ずる日はまだ決らないが、たゞ青龍の牙旗を挿んだ舟が來ましたら黄蓋の舟だと思つて下さい。」

といつてやつたので曹操は益々信じて大に得意になつた。

周瑜は中軍に出て計を議した。そこに龐統(龐士元ともいつて孔明と並び稱せられた鳳雛先生のこと)がゐたが、火攻より外に操を破る法はないといつた。瑜が自分もさうだと思つてゐるといふと、統は

「渺々たる大江の上、一艘の船に火がついたら他の船は皆四方に散るであらう。だから連環の計でもつて操をだまして、彼の船を一所に集めさせて殘らず燒きつくし

たらどうだ。」

とすゝめた。その時江北から曹操の家來の蔣幹が來たので瑜は早速之を捕虜にして西山の幽谷におしこめた。或夜幹は餘り遠くない所の庵に兵書を讀んでゐるものがある事を知つたので行つて見ると龐統であつた。統は

「瑜のやつ自分が才智があるといふので自惚て忠臣達の諫をきかぬばかりか德のある人や人望のある人を妬んで色々の事をするから、いやになつてしまふ。私はつまんないから、此所に來て出ないんだ。」

と幹に話した。幹は

「卿位の智恵者なら何でも思ふ通りになるだらう、何も吳ばかりが天下でもあるまい。そんなら吳を去つて魏に仕へたらいいでせう。何なら私と一緒を行つて私が曹操

に話してあげませう。」

と乘り氣になつた。そこで二人は夜にまぎれて西山を出て舟にのつてこつそり魏軍に行つた。

曹操は統が來たので大喜びで酒をのませて歡迎した。又馬にのつて一緒に陣を見まはつたりした。歩いし見ると舟手の病氣にかゝつてゐるものが多いので、統は

「兵法陣法はよく行きわたつてゐますが、惜しい事にはまだ完全ではありませんね。その證據には舟手の病人が多すぎます。」といつた。

操「先生どうか敎へて下さい。どうしたらいいでせう。」

統「大江の中に舟を浮べますと汐の滿干につれて風が吹いたり、波が起つたりします。中國の人は船になれないからそのために病氣になります。もし大小の船を集めて三

十だとか五十だとか一列にならべて首尾に鎖をつけて環でもつて連ねて、その上に板を敷いてそこを往來しますと人でも馬でもさながら野原を行くやうで安心なものです。風に從ひ汐にまかせて江を上るにも下るにも心のまゝで船の中も自ら安穩でせう。」

操は大變喜んで直に鍛冶を集めて環を鑄たり、鎖を鍛へたりさせて、大小の兵船を皆鎖でもつてつないだ。そこで統は自分の連環の計がうまくいつたのを喜んで

「私はあなたのやうな明君にあつて愉快でたまりません。私も誠を盡して忠義を致さねばなりません。呉の方はなか〳〵自分でよい考へがあつても用ゐられませんので諸將は皆周瑜をうらんで二心をもつてゐます。私が丞相のために諸將を說いたら恐らく皆こちらにつきませう。

操「先生まことにさうお思ひならば再び國にかへつて同志を語らひなさい。都合よく行つたら成功の後に三公に封じませう。」

そこで統は呉軍にかへつた。

曹操は兵船をつらねて各將を分けて之れに乘らせて鼓を打つて船軍の調練に力めさせた。軍中に程昱といふ者が居たが操に向つて兵船をとと〳〵く鎖でもつて連ねてゐるのに敵が火で攻めて來たらどう致しませう、これは危險ではございませんかといつた。操は笑つて

「汝は遠い慮がある。惜しい事には兵を用ふる所の法を知らないものだ。一體大將たる者は先づ天の時を明め地の理を察した上で兵を用ひねばならぬ。今は時でいつたら十一月の末で西北の風は吹くけれど東南の風は吹かない。しかるに我軍は江

は建安十三年十一月二十日の事である。

風はまだ起らないのに瑜は程普、魯肅などを本陣に集めて、もし東南の風が起つたら攻めかゝらうと命じて、呉の孫權にもその事を報告させた。黄蓋は二十艘の快走船に乾いた萩や枯れた柴などを積んだのに油をそゝいでおいて上から幕で包んで青龍の牙旗をたてた。

瑜は甘寧を呼んで汝は烏林に行つて操の兵糧に火をかけよと命じ、第二番に太史慈を招いて汝は黄州の境に出て火をかけて操の本陣を攻めよ、第三番に呂蒙を呼んで汝は烏林にいつて甘寧と力を併せて操の陣を焼き拂へ、第四番に凌統、汝は夷陵の境に行つて烏林に火の手が見えたら急進して敵を攻めやぶれ、第五番に、董襲、汝は漢陽から漢川に出て操の陣に斬入れ、そして白い旗が見えたら味方の援兵だと思へ、第六

番に潘璋汝は白旗をたてゝ漢陽に向つて董襲を救けて共に操の陣に攻めかゝれと、それ〴〵手を分けて命じた。陸路六隊は軍馬各三千づゝ自分の受持の方にまつしぐらに進んだ。

船手の先陣の黄蓋はこつそりと使を操にやつて今宵二更兵糧を船に積んで降參してまいりますといはせて、彼の火船二十艘を先頭に第一の備には韓當、第二には周泰、第三には蔣欽、第四には陳武と三百艘餘の兵船を揃へて用意をした。周瑜、程普は後陣につゞいて本陣は魯肅、闞澤、龐統が留つて守ることになつた。

はたして日暮になると東南の風が吹きはじめた。陸の呉軍は自分の持場にそれ〴〵今か〳〵と待構へてゐる。舟軍の火船は帆に風を孕んで先づ出た。約束の二更（午后

北に陣してゐて呉の軍は我が南ではないか。敵が若し火攻の法で來たら西北の風に吹かれて却つて自分の船を燒き捨てることになるだらう。」

といつて問題にしなかつた。

操がいふ通りの事で敵將の瑜は思ひわづらつてとう〳〵病氣になつてしまつた。運よくこの時はまだ孔明が呉の陣にゐたので瑜が苦悶の末病氣になつたと聞いて病床を見舞つた。瑜は孔明ならば智惠者であるから自分の病根を知つてゐるだらうと思つたので

「氣を順にするやうな藥はどんな計であらう。」

といつた。孔明は笑つて

「私は一つの計略がある。これをやつたら都督の御病氣はひとりでになほりませう。」

といつて紙に『曹公を破らむと欲せば、よろしく火攻を用ふべし。萬事ともに備つて唯東風だけがたりない』と書いて

「これが病氣の根源でせう。」

といつたのに瑜も驚いてしまつた。先生は既に私の病根を御承知だ。今は一刻を爭ふ急場であるからどうしたら病氣がなほるか教へて下さいといつた。

孔明「私は前に異人にあつて八門遁甲の天書を手に入れた。それによつて風を呼ぶ法を知つてゐます。もし都督が南の風をお望みであるならば、南屏山に壇を築いて、七星壇を設けて祀りをなさい。」といつた。

そこで瑜は士卒をやつて壇を築かせた。孔明は齋戒して祀を始めて風を呼んだ。それ

は建安十三年十一月二十日の事である。

風はまだ起らないのに瑜は程普、魯肅などを本陣に集めて、もし東南の風が起つたら攻めかゝらうと命じて、呉の孫權にもその事を報告させた。黄蓋は二十艘の快走船に乾いた萩や枯れた柴などを積んだのに油をそゝいでおいて上から幕で包んで青龍の牙旗をたてた。

瑜は甘寧を呼んで汝は烏林に行つて操の兵糧に火をかけよと命じ、第二番に太史慈を招いて汝は黄州の境に出て火をかけて操の本陣を攻めよ、第三番に呂蒙を呼んで汝は烏林にいつて甘寧と力を併せて操の陣を焼き拂へ、第四番に凌統、汝は夷陵の境に行つて烏林に火の手が見えたら急進して敵を攻めやぶれ、第五番に、董襲、汝は漢陽から漢川に出て操の陣に斬入れ、そして白い旗が見えたら味方の援兵だと思へ、第六番に潘璋汝は白旗をたてゝ漢陽に向つて董襲を救けて共に操の陣に攻めかゝれと、それ〴〵手を分けて命じた。陸路六隊は軍馬各三千づゝ自分の受持の方にまつしぐらに進んだ。

船手の先陣の黄蓋はこつそりと使を操にやつて今宵二更兵糧を船に積んで降參してまいりますといはせて、彼の火船二十艘を先頭に第一の備には韓當、第二には周泰、第三には蔣欽、第四には陳武と三百艘餘の兵船を揃へて用意をした。周瑜、程普は後陣につゞいて本陣は魯肅、闞澤、龐統が留つて守ることになつた。

はたして日暮になると東南の風が吹きはじめた。陸の呉軍は自分の持場にそれ〴〵今か〳〵と待構へてゐる。舟軍の火船は帆に風を孕んで先づ出た。約束の二更（午后

十時）になると操は遠く江上に青龍の牙旗が風にひるがへつてゐるのて見て愈々黄蓋が來たと限りなく喜んでゐる。と舟が操の方の水寨から十二町位の所に來ると急にしかも一齊に火がついた。その早い事たら矢のやうで二十艘の火船が水寨につき入つて來て紅蓮の焔は忽ち魏軍の兵船に燃え移つた。思つた事とあまりに違ふので魏軍は手のつけやう糸ない。吳の水軍はときの聲をあげて攻めかゝるので燒死するもの、溺るゝもの、討たるゝもの數知れず、御大の曹操さへやつと身一つで命からがら陸に逃げ上つた所が、既に陸の陣營も悉く敵のために火をかけられてゐる。吳の軍勢は勝に乘じて四方からとき、を作つて散々に射るので百萬の大軍も殆んど全滅の形で僅に百騎を從へて操は烏林の方に逃げた。烏林の方に馬を急がせると後から呂蒙の軍、前からは凌統の兵が挾み擊にかゝつた。これはたまらんと操は馬の首を横に向けて南を指して

かけさせた。六十町もいつたと思ふ頃甘寧の軍がまつてゐましたとばかりに擊つてかゝるので、かなはないと思つて西の方に出て荆州路に入つた。所がこゝにも劉備の方の趙雲がゐて鼓を鳴らして出て來たので又走つて南の夷陵の葫蘆谷に行つた。そこにも劉備の方の張飛がゐて鋒を舞はし馬を飛ばして操を追つて來た。操は家來の張遼、徐晃など馬を並べて防いでくれたのでやつとの事で九死に一生を得た。

翌二十一日の未明に華容道の山險にかゝると前夜の雨で、すつかり道がどぶ〳〵で歩けない。仕方がないから草で埋めて人馬をやつた。すると向ふには又劉備の方の關羽が五百騎でかためてゐる。操も愈々武運もつきたと諦めて今はいさぎよく討死と覺悟をきめた。けれども家來達がとめて、丞相は先に關羽のために深い恩を施こされたことがありますが彼は仁義に厚い男だから御自身でお話になれば、きつとたすけませ

うといふので操も馬を進めて羽にあつて、昔のよしみでこゝは一つ逃してくれとたのんだ。羽は何とも口では答へなかつたが路を開いて操の軍を通した。操は危く虎口の難をのがれて部將の曹仁が守つてゐる江陵の城に入つて、それから北の許の都にかへつた。

これからも度々曹操は孫權を攻めて見たけれど一度もうまく行かないので嘆息して子供をもつならば孫權のやうなのが欲しい、そこになるとあの劉表の子供達は一たまりもなく自分に攻め滅されたがあれは豚や犬の子も同樣だといつた。

何といつても赤壁の戰は三國（魏、吳、蜀漢）が鼎立する上においての力强い楔であつた。このために操の大志（統一）は出來なかつたが吳、蜀の立脚地が保證されたから。（完）

大正十三年四月五日印刷
大正十三年四月十日發行

孔明
定價五十錢

東京市外池袋一〇三九
讀本の讀本社
著作兼發行者　代表者　執行助太郎
東京市本所區北二葉町二十七番地
印刷者　小池善藏
東京市本所區北二葉町二十七番地
印刷所　さくら舍印刷所

東京市外池袋一〇三九
（振替東京五七二九一）
東京市外池袋八六七
（振替東京二三九二八）
發行所　執行文庫
成蹊出版部

讀本の讀本
綱纂趣意書
は執行文庫
へ御申込み
下さい

近刊
塙保己一
兒島高德
リヤ王物語

3F-90

515
134

終